

はじめに

三宅村立三宅小学校 校長 堀 俊司

本校は東京都教育委員会より「情報活用能力育成研究校」の指定を受け、この2年間、子供たちの未来を見据えた新たな学びの創造に取り組んできました。急速な技術発展と予測困難な社会情勢の中を生きる子供たちにとって、情報を見極め、つなぎ、活かし、仲間と協働しながら課題を解決する力は、もはや特別な技能ではなく「学習の基盤」として欠かせない資質であります。そのために本校では、「主体的・協働的な学びを育む ICT 活用」と「情報活用能力の段階的な育成」という研究主題を掲げ、全校体制で授業改善を進めてまいりました。

研究では、教員が知識を与える存在から、児童の思いや問いを導く伴走者（ファシリテーター）へと役割を転換し、子供たちが学習を自ら「操縦」できる環境づくりを重視しました。オクリンクプラスをはじめとする ICT ツールは、単なる効率化の道具ではなく、思考を可視化し、比較・分類・分析を可能にし、互いの意見を認め合う協働の場をつくり出しました。教員の入力に時間を要する場面や、低学年での操作が「遊び」に流れそうになる課題も見られましたが、児童の思考が深まる手立てや学習段階の整理、「三宅モデル」の作成など、研究の蓄積を踏まえて改善を重ねてきました。

更に、三宅島という地域の特性を生かした単元設計は、研究の核となりました。火山の噴火の歴史を自分たちの島の姿と重ねて考える理科、地域の専門家へのインタビューや社会科見学の情報を ICT で整理し、根拠をもって議論する社会科、あるいは低学年の生活科における視覚的な整理活動など、「地域のヒト・コト・モノ」と出会うことで、学びが確かに「自分ごと」へと変わっていきました。

一連の研究授業を通して、子供たちの間には、自分の考えを言葉にし、友達の意見に耳を傾け、必要に応じて考えを更新していく姿が数多く見られるようになりました。しかし、同時に、問いを生み出す力、根拠を言語化する力、学びを自己調整する力など、育成すべき課題も明らかになりました。これらは研究指定校の期間で区切られるものではなく、むしろ、これからの教育の中心に据え続けなければならない永続的なテーマであります。

子供たちが未来の荒波の中でも、自ら舵を取り、仲間と航路を選び、ときに迷いながらも進んでいけるように。本研究の成果が、そのための確かな「灯」となり、本校教育の歩みを力強く支えていくことを願っております。

結びに、研究を進めるにあたり、ご指導いただいた講師の皆様、東京都教育委員会、三宅村教育委員会、保護者・地域の皆様、そして日々の授業改善に誠実に向き合い、共に学び合ってきた教職員に、心より感謝を申し上げます。

I 研究の概要

研究推進委員長 小林 哲也

1 研究主題

主体的・協働的な学びを育む ICT 活用の在り方 ～情報活用能力の段階的な育成を通して～

2 研究設定の理由と児童の実態

東京都教育委員会から情報活用能力育成研究校の指定を受け、研究を開始してから2年目を迎えました。昨今急激に発達をしている AI 等の先端技術が社会のあらゆる場面に浸透し、これからの時代はますます予測困難となっています。そんな未来を生きる子供たちには、社会の変化を柔軟に受け止めて主体的に学び続けていくことが求められます。このような背景のもと、本校では学習指導要領で言語能力などと同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられている情報活用能力の段階的な育成を研究主題に据えました。情報活用能力は、情報や情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力です。

研究1年目は、前年度の研究から得た児童の課題と東京都の「情報活用能力#東京モデル」を参考に、児童の情報活用能力がどの程度身に付いているのか実態調査を行いました。課題としては、「自分の気持ちを言語化すること」、「児童が学習を主体的に進めること」が挙げられ、調査結果からは、「情報端末の操作スキル（基礎スキル）」は、十分に身に付いているが、学習場面において自分の考えをもったり、まとめたり、整理したり、学びを深めたりする「情報活用スキル」は十分に育まれていないことが分かりました。更に、情報モラルについても理解を深める必要があると分かりました。

そこで研究2年目となった今年度は、上記の研究主題を掲げ、「基礎スキル分科会」「情報活用スキル分科会」「授業研究分科会」の3つに分け、学習の根幹である教科で身に付けるべき力を軸にして、土台となる学年相応の情報活用能力の段階的な育成について研究を行ってきました。

3 目指す児童像

課題を自ら設定し、それを解決するために、目的や意図に応じて適切に情報を収集したり、友達と協働したりしながら探究的な学びに継続して挑戦する子。

4 研究仮説

情報活用能力を系統的に指導し、教科学習で教員がファシリテーター（伴走者）として、児童同士の協働的な学びを促す学習環境を構築していくことで、児童は互いの考えや思いを認め合いながら、主体的に探究的な学びに挑戦していくだろう。

5 分科会設定の理由

今年度の授業者の手立てとして、「(ICT等を活用した)効果的な協働的学び」「地域のヒト・コト・モノとの出会いを想定した単元計画」、「児童の思いを導くファシリテーター（伴走者）としての関わり」を挙げたことにより、学年関係なく、多様な視点から授業づくりを行うことができるようにしました。また、学習の土台となる情報活用能力育成のため、「基礎スキル分科会」「情報活用スキル分科会」と明確に分け、段階的な育成を図るための方策について検討していき、研究授業の視点に必ず取り入れるようにしていきました。また学習の時間だけでなく、朝の時間に行っている基礎スキルや情報モラルの定着を図る「I タイム」についても、実態を踏まえ、よりよいものに改善していけるようにしていきました。

【三宅小学校教育目標】

◎自らすすんで学ぶ子 ○やさしい心をもち協力できる子 ○健康な心と体をもつ子

【学習指導要領】

- ・情報活用能力は学習の基盤となる資質能力
- ・教科等横断的視点から教育課程の編成を図るもの

【情報活用能力育成研究校】

一人1台端末時代の日常的な端末活用に向け、学習指導要領及び都教育委員会の教育目標等に基づき、学校において一人一人の児童・生徒に応じた情報活用能力を育成するとともに、日常的な端末活用に向けた実践を研究し、その効果を普及する。

【児童の実態】

ICTに関する児童のトラブルは減ったものの、語彙力・表現力への課題が見られ、自分の思いを正しく言葉で表現できない場面がある。また、自ら課題設定することに苦手意識のある児童が多い。

【教師の願い】

友達の意見を高め合いながら、自分の思いを表現できるようになってほしい。

【研究主題】

主体的・協働的な学びを育む ICT 活用の在り方～情報活用能力の段階的な育成を通して～

【目指す児童像】

課題を自ら設定し、それを解決するために、目的や意図に応じて適切に情報を収集したり、友達と協働したりしながら探究的な学びに継続して挑戦する子。

【研究仮説】

情報活用能力を系統的に指導し、教科学習で教師がファシリテーター（伴走者）として、児童同士の協働的な学びを促す学習環境を構築していくことで、児童は互いの考えや思いを認め合いながら、主体的に探究的な学びに挑戦していくだろう。

情報活用能力

【研究主題に迫るための手立て】

【基礎スキル分科会】

- 実態把握
 - ・GIGA 検定の実施 ➡ 分析
- 系統的な基本的技能の精選
 - ・三宅モデルの作成
 - ・朝の時間を活用した I タイム計画

【情報活用スキル分科会】

- 児童及び教師の情報活用能力の実態把握
 - ・アンケートによる分析
- ➡教師の強み弱み、児童の強み弱みを把握し、三宅の情報活用能力を伸ばす観点を整理

【授業研究分科会】

- 児童の主体性を育む
 - ・単元設計 ➡ 地域のヒト・コト・モノとの出会いを想定した単元計画
 - ・教師のファシリテート ➡ 児童の思いを導く伴走者、思考ツールなど視覚化した手立ての活用
- 協働的な学びを深める
 - ・適切な ICT ツールの活用及び学習環境の構築
 - ・情報活用能力の実態を生かした指導法

互いの良さを認め合い、学び続ける子

7 情報活用能力について

情報活用能力育成に向けて、まずは、東京都教育委員会作成の「情報活用能力#東京モデル」(以下：東京モデル)を参考にしました。東京モデルは、発達段階を踏まえ、ステップごとに育成したい資質・能力を示しています。

観点	趣旨	小項目	STEP1	STEP2	STEP3	STEP4	STEP5
知識・技能	情報活用の方法	見通し	情報活用を見通しをもてる	目的を意識して、自ら情報活用計画を立てる	問題解決に向け、自ら情報活用計画を立てる	所与の条件を踏まえて、情報活用効果的な計画を立てる	シミュレーション結果を踏まえて、情報活用効果的な計画を立てる
		収集	情報を収集する身近な方法を知り、実施できる	情報を収集する基本的な方法を知り、実施できる	調査を設計し、情報を適切に収集・検証できる	統計的な調査を設計し、情報を効果的に収集・検証できる	統計的な調査を設計し、情報を効果的に収集・検証できる
		整理	絵や図、簡単な表やグラフを用いて情報を整理できる	表やグラフなどを用いて情報を整理できる	目的に応じて、表やグラフを用いて情報を整理できる	目的に応じて、表やグラフを用いて情報を統計的に整理できる	統計指標、回帰、検定などを用いて情報を統計的に整理できる
		分析	1～2点の情報から、その大体を捉えられる	2～3点の情報から、傾向、変化を捉えられる	複数の情報から、傾向や変化を捉えられる	目的に応じて収集した資料から、傾向や変化を適切に捉えられる	目的に応じて収集した資料から、傾向や変化を客観的に捉えられる
		表現	相手を意識して表現できる	相手や目的を意識して表現できる	相手や目的に応じて表現できる	相手や目的に応じて、適切に表現できる	相手や目的に応じて、効果的に表現できる
		発信	相手に応じて情報の発信・交信ができる	相手や目的に応じて安全に情報の発信・交信ができる	相手や目的に応じて適切に情報の発信・交信ができる	Web、SNS、ライブ配信等、相手や目的に応じて効果的に情報の発信・交信ができる	Web、SNS、ライブ配信等、相手や目的に応じて効果的に情報の発信・交信ができる
		協働	クラウド等を用い、ファイルの呼び出しや保存ができる	クラウド等を用い、ファイルを検索できる	クラウド等を用い、ファイルやフォルダを適切に管理・活用できる	クラウド等を用い、情報を効果的に管理・活用できる	クラウド等を用い、情報を効果的に管理・活用できる
		改善	情報活用を振り返り、自らの解決のよさを確かめられる	情報活用を振り返り、改善点を見いだせる	情報活用を振り返り、効果点を見いだせる	情報活用を振り返り、観点を決めて評価し、改善できる	情報活用を振り返り、効率化の観点から評価し、改善できる

※情報活用能力#東京モデル 情報活用分野 「知識・技能」をステップ化したもの

一般的に STEP 1 が低学年 STEP 2 が中学年 STEP 3 が高学年 STEP 4 以降は中学校以降の指標となります。

上の指標から本校独自の「情報活用能力#三宅モデル」(以下：三宅モデル)の作成を行いました。

＜本校独自の学習段階＞

計 画

情報収集

情報整理

分 析

発 信

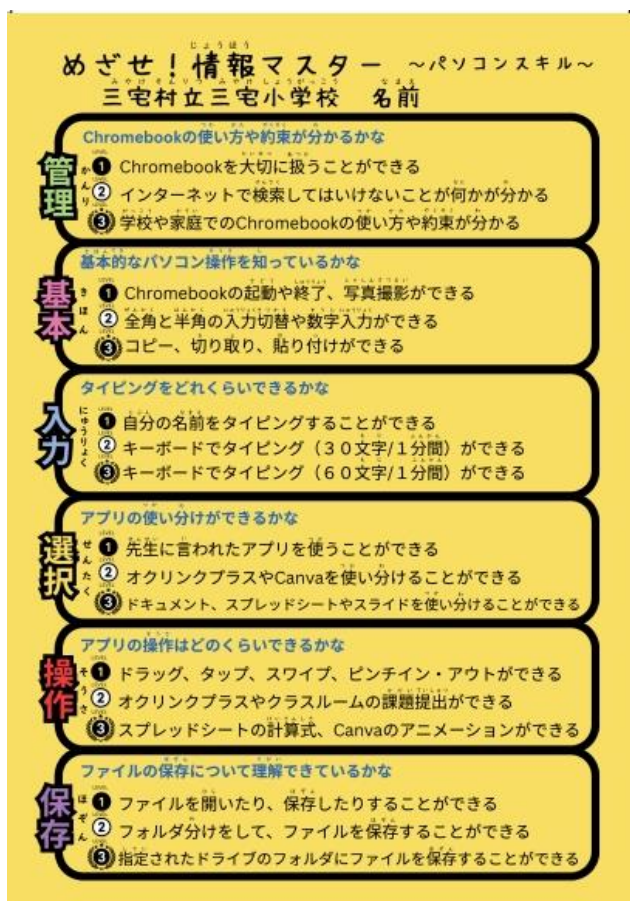
振り返り

参考：東京都教育委員会 情報活用能力#東京モデル

静岡大学教育学部塩田研究室×掛川市立第一小学校作成「情報活用能力(情活)」より

上記の学習段階を意識し、「(本時の)学習はどの段階なのか」「なぜそのツールを活用するのか」「(単元で)高めたい情報活用能力とその項目は何か」を明確にし、授業作りを行いました。また児童にも「情報活用」の視点をもって、学習に取り組めるよう「情報マスター」として、低学年・中学年・高学年のねらいを3段階のレベル分けを行った本校独自の製作物として下敷きを製作し、児童に配布を行いました。

<児童に配布した三宅モデル>



（基礎）パソコンスキル編



（情報）活用スキル編

8 各分科会の柱

基礎スキル分科会では、児童の情報活用能力を体系的に育成することをねらいとしています。また「GIGA検定」を活用し、児童の客観的な指標から情報活用能力がどの程度身に付いているのかを分析し、改善につなげていきます。また、研究授業を通して「三宅モデル」の妥当性を検証し、児童の実態に合った指導計画に更新していきます。

情報活用スキル分科会では、教員及び児童の情報活用能力の実態把握を行いました。そこから教員と児童それぞれの強みと弱みを分析し、三宅の情報活用能力を伸ばす観点を整理しました。三宅小学校の児童の強みを伸ばし、弱みについては指導を計画していけるようどの力を高めていくのかを整理しました。研究授業を通して「三宅モデル」の学年に応じた段階に迫るための手立てについて、協議を行って行きました。

授業研究分科会では、探究的な学びに継続して挑戦する児童の育成を目指し、3つの柱を設定しました。まず、①地域のヒト・コト・モノとの出会いを単元に組み込むことで、学習への関心を高め、課題を「自分ごと」として捉えさせること、次に、②協働的な学びを促進するツールの活用を日常化し、思考の整理・共有を図り、協働的な学びの基盤を構築すること、最後に、③教員は伴走者として児童が根拠をもって考えを共有し、学習を自己決定できる主体的・協働的な学びの充実を目指すことです。

これらの研究実践を通して見えてきたのは、情報活用能力とは、単なる ICT スキル習得にとどまらず、子供たちが自らの問いに基づき、他者と関わりながら学びを自己調整していく力を育む上で、まさに「学習の基盤」として機能するということです。

Ⅱ 研究の過程

授業者として、研究主題を達成するために、以下の3点に注力しました。

- 1 地域のヒト・コト・モノとの出会いを想定した単元計画
- 2 協働的な学びを促進するツール活用
- 3 主体的・協働的な学びを展開するための教員のファシリテーターとしての関わり

1 地域のヒト・コト・モノとの出会いを想定した単元計画

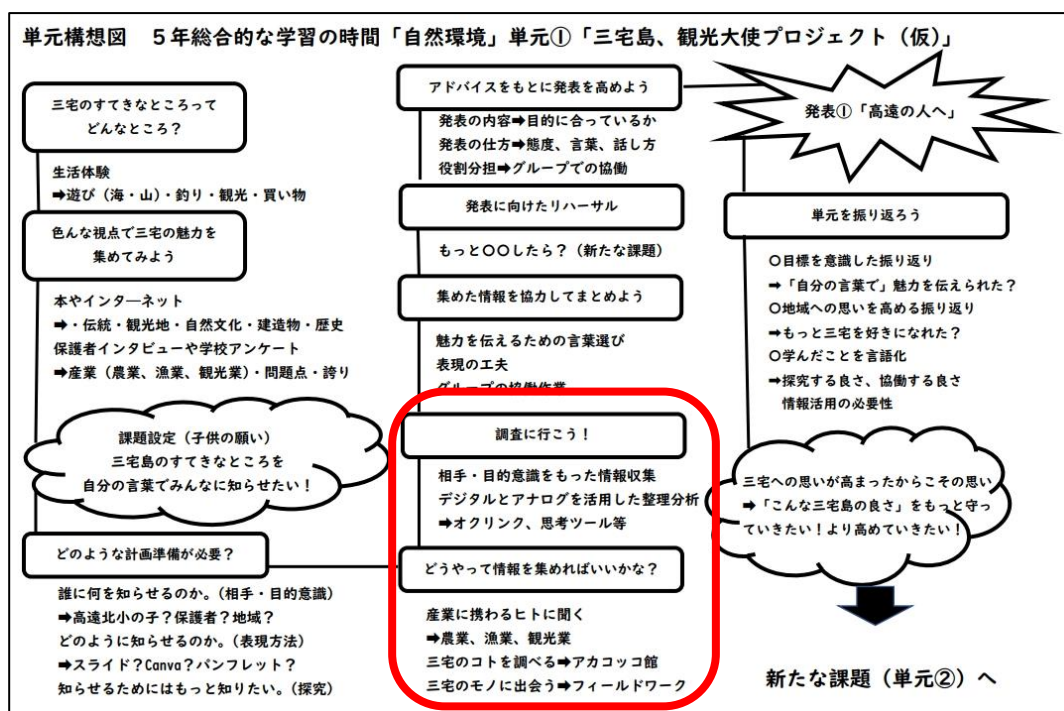
三宅島の自然環境や地域資源であるヒト・コト・モノとの出会いを学習過程に積極的に設定しました。これにより、児童が学習内容を「自分ごと」として捉えられるよう単元を構成し、地域の実態に合わせた単元の順序の変更（例：火山による地層➡川による地層）を行い、地域の専門家へのインタビューや、実物を見たり、触れたりすることを通して、郷土愛を育みながら探究的な学びへの継続的な挑戦を促しました。以下は、ヒト・コト・モノを整理したものです。

<○は三宅島のヒト・コト・モノ ●は令和6年度、令和7年度に学習で関わった三宅島のヒト・コト・モノ>

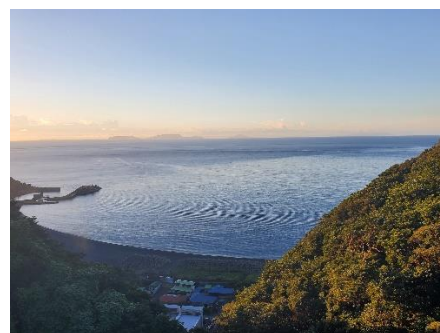
ヒト	コト	モノ
<ul style="list-style-type: none"> ●産業で働く人 <ul style="list-style-type: none"> ・漁業 ・観光業 ・農業 ・建設業 ●各地区の保存会 ●各地区の青年団 ●レンジャー ●役場で働く人 ●卒業生 ●コミュニティスクール ●老人会 ○ネイチャーガイド 	<ul style="list-style-type: none"> ●自然（海、火山） ●伝統文化 <ul style="list-style-type: none"> ・木遣り太鼓 ・獅子舞 ・天神太鼓 ・ヨミンチャラ ・観音丸 ・島節 ●食文化 <ul style="list-style-type: none"> ・サツマモチ ・明日葉 ・パッションフルーツ （とろぴか丸） ・ムロアジ ○行事 <ul style="list-style-type: none"> ・午頭天王祭 ・富賀大祭 ・産業祭 ・マリンスコーレ ・船祝い ・盆踊り ・秋祭り ・初午 ・エンドウロ・ウィーライド 	<ul style="list-style-type: none"> ●公共施設 <ul style="list-style-type: none"> ・役場 ・支庁 ・図書館 ・警察署 ・消防本部 ・郵便局 ・ふるさと郷土資料館 ・クリーンセンター ●観光施設 <ul style="list-style-type: none"> ・観光協会 ・アカコッコ館 ・ふるさとの湯 ・レクリエーションセンター ●防災施設：伊豆避難施設 ●火山景観 <ul style="list-style-type: none"> ・噴火口 ・スコリア ・大路池 ・阿古の火山体験遊歩道 ・ひょうたん山 ・椎取神社 ・長太郎池 ●商店・食品店 <ul style="list-style-type: none"> ・ファーマーズマーケット ・お魚センター ●宿泊施設 ●介護施設：あじさいの里 ●生き物（三宅島の固有種） <ul style="list-style-type: none"> ・野鳥 ・魚 ●有形文化財 <ul style="list-style-type: none"> ・旧島役所 ・神社 ○自然保護施設：伊豆緑産 ○巨樹

<事例（１） ５年生 総合的な学習の時間「三宅島の魅力」>

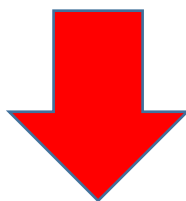
自然環境をテーマにした三宅島の魅力を発信する学習を行いました。ふだん目にしているものや体感しているものだからこそ自分たちの「伝えたい」思いをもち、自分たちの言葉で表現することができました。



地域のヒト・コト・モノとの出会いを想定した単元計画を想定しておくことで、スムーズに学習に臨める。



実際に五感を使って、三宅島の魅力を感じる。



絵本



パンフレット



農産物や噴火による形成物、海の魅力をまとめた動画

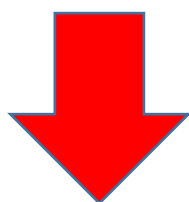


＜事例（２） ６年生 理科「大地のつくり」＞

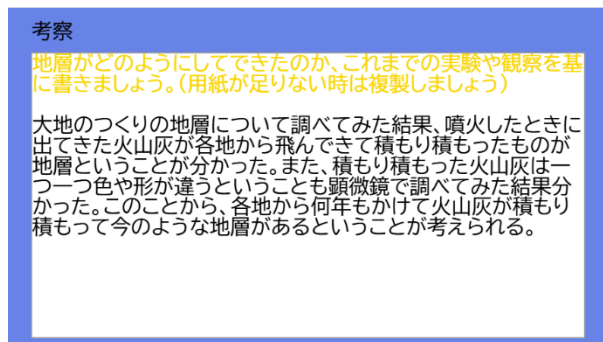
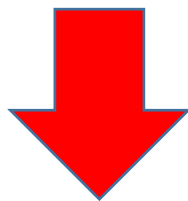
一般的に「流れる水の働きによってできる地層」→「火山活動によってできる地層」の順で学習しますが、単元を入れ替えて身近にある火山でできた地層を先に学習を始めました。地域の実態を生かすことで、主体的に学習に取り組んでいくことをねらいとしました。



フィールドワークから実物を目にすることで、自然に気付きと課題が生まれる。



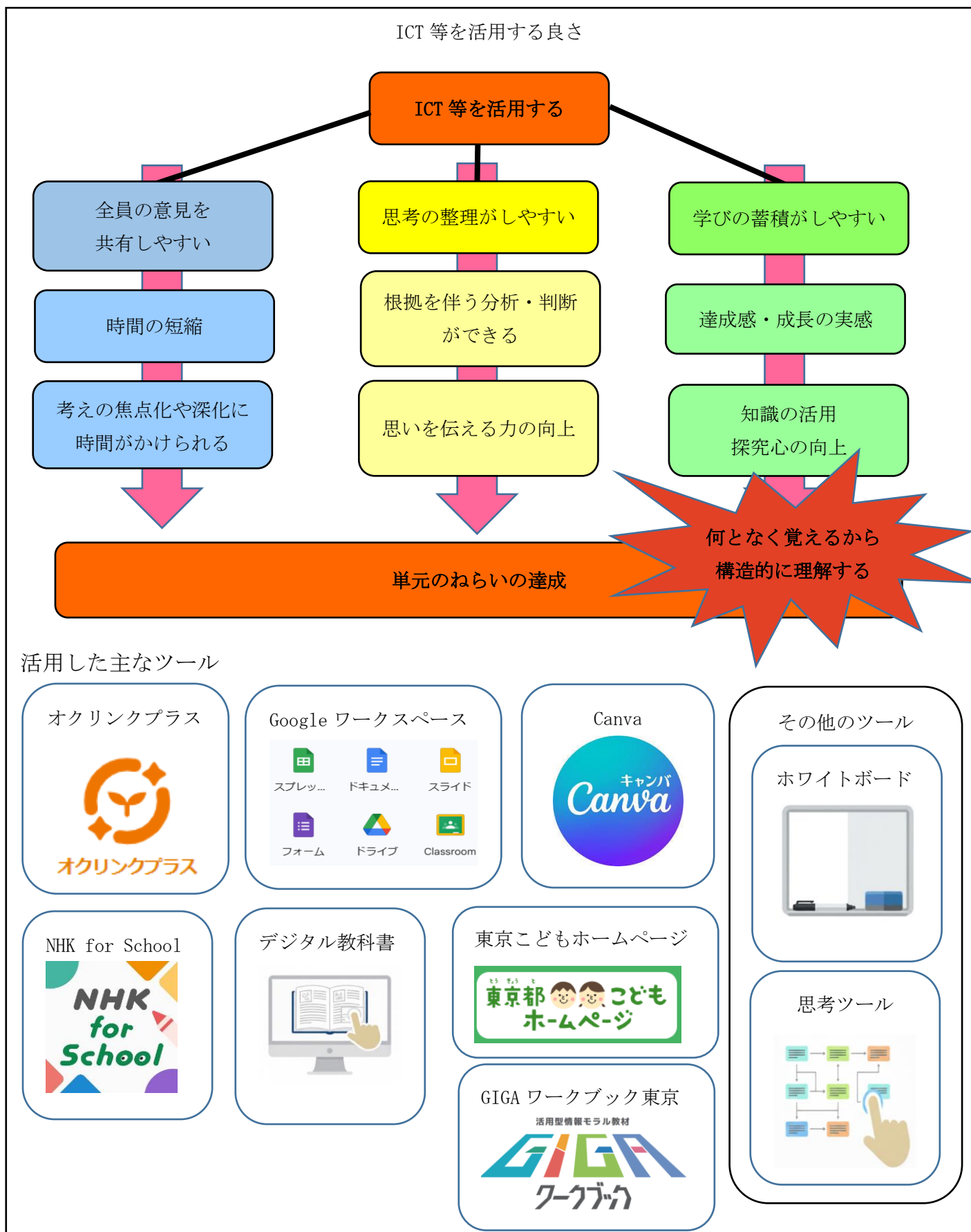
児童の気づきをイラストや言葉で集め、協働的に整理・分析していく。



話し合いを重ねて単元を通した課題に対する答えを自分たちの言葉でまとめる。

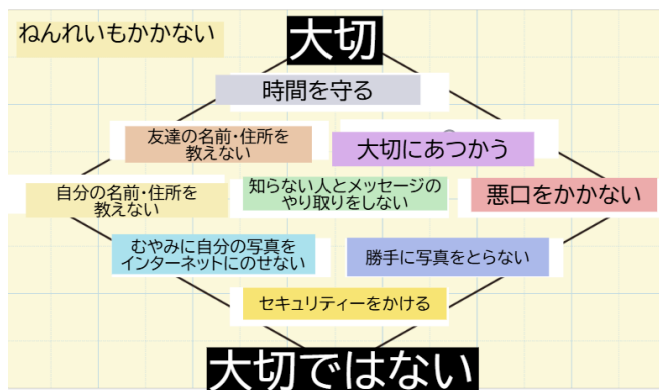
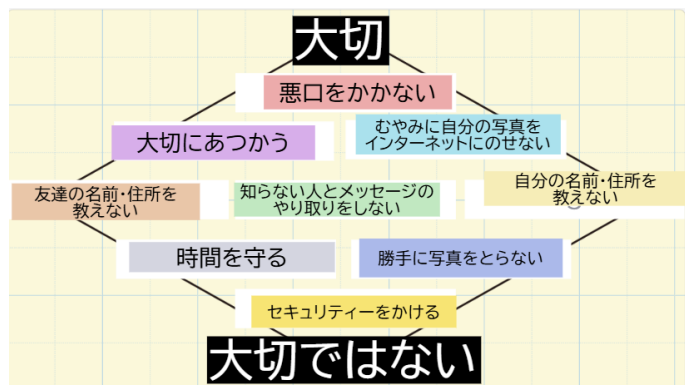
2 協働的な学びを促進するツールの活用

ICT 等を活用して、協働的な学びが促進されるよう「活用することが目的」ではなく、「目的（単元のねらい）を達成するための ICT 等の活用」となるように心掛けました。デジタルだけでなく、アナログ（ホワイトボード等）も活用し、協働的な学びに向けてそれぞれの良さについて検証を行いました。また、思考を整理・分析するツールとして思考ツールも積極的に活用していききました。

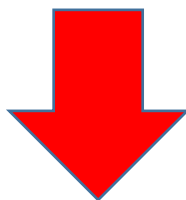


<事例（１） ３年生 道徳「インターネットにむちゅう」>

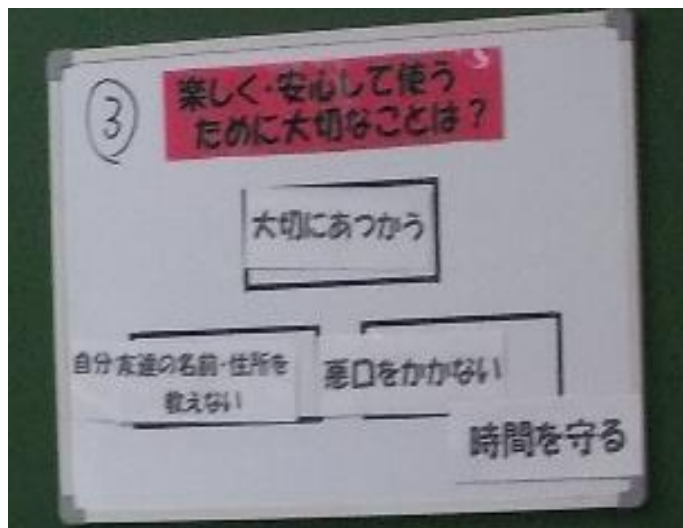
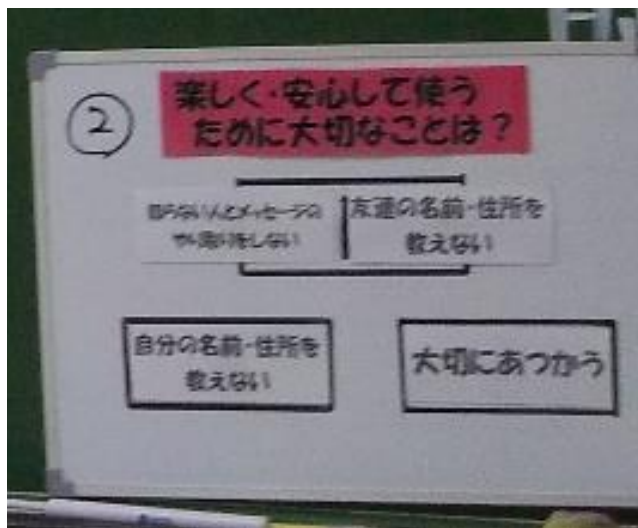
道徳の授業でインターネットの使い方について学んだ後、Chromebook を利用するときには、どんなことに気を付けると良いか話し合いました。項目は教員から提示し、大切だと感じた順に優先順位をつけて、グループや全体で話し合いました。



個人で考えをもつ。



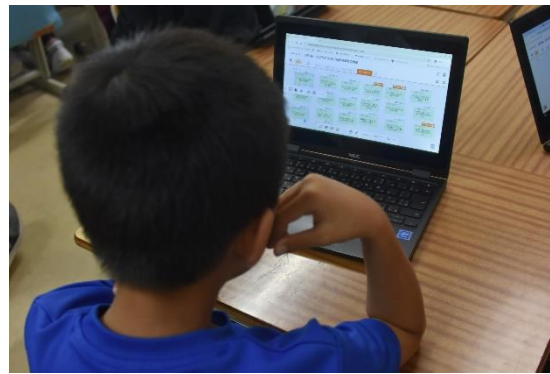
グループで話し合い、1つのホワイトボードにまとめる。



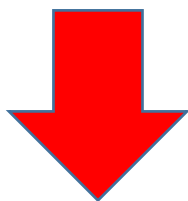
順位付けをして、その順位の根拠を説明する。

<事例（2） 2年生 生活科「まちたんけん」>

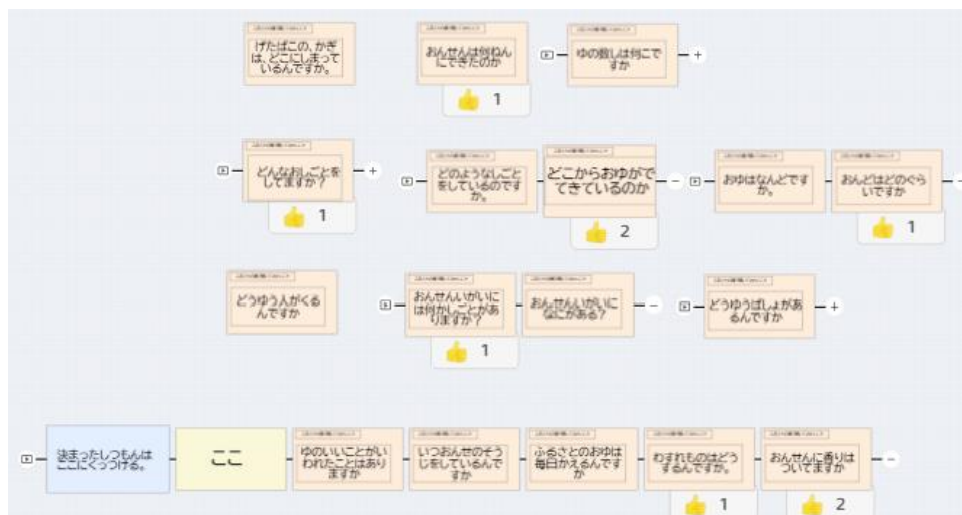
町探検に向けて地域の暮らしや公共施設の良さを知るためにどんなインタビューをしたら良いか話し合いました。知りたいと思う多くの意見の中から、実際に何を聞いたら良いか考えて、質問を整理しました。



みんなから集まった質問リストに「これ聞きたいな」と思ったものに個人で「いいね」を付ける。



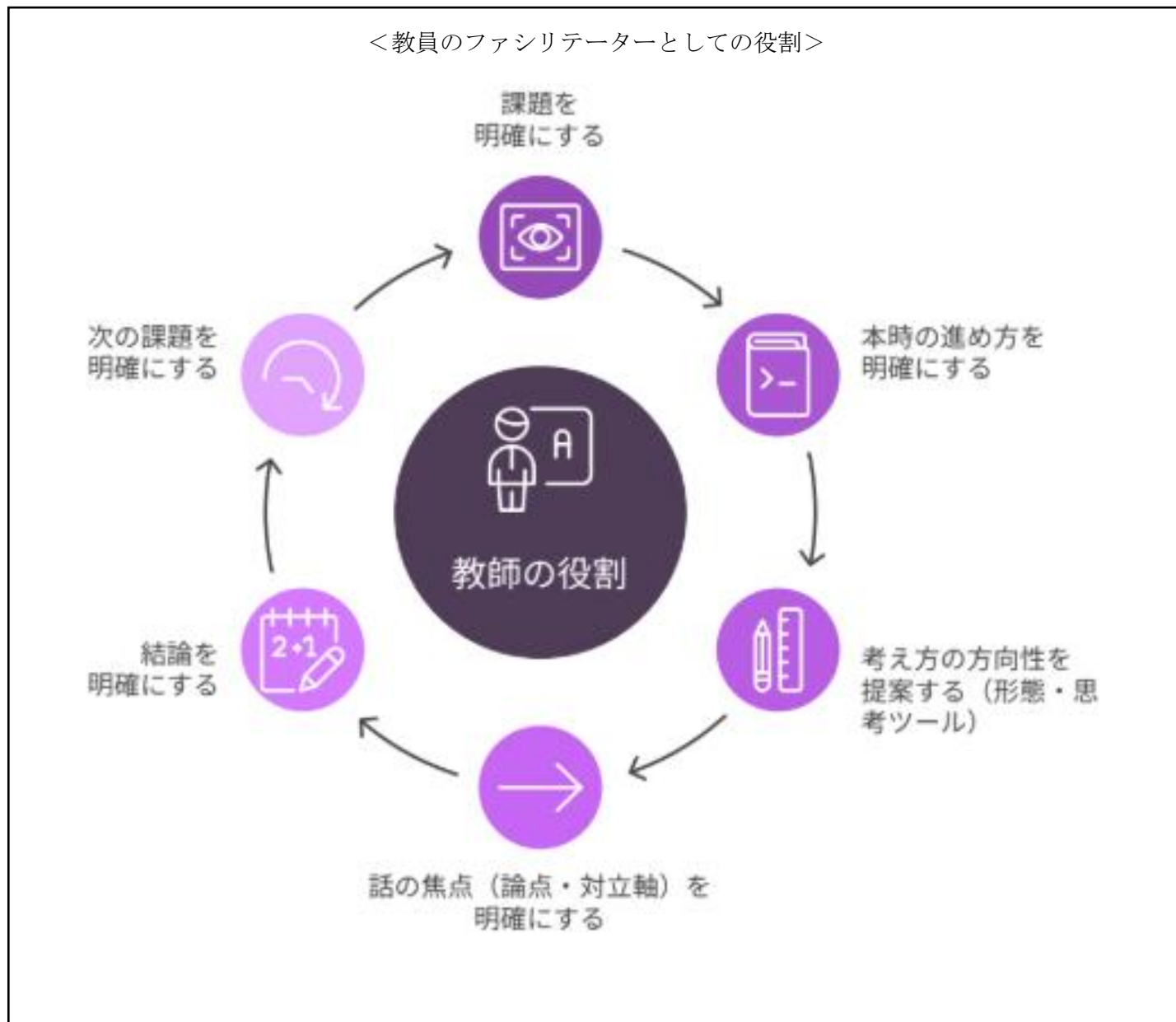
「いいね」の数で決めるのではなく、同じような質問や聞きたいことを整理して、実際に質問することを決定していく。



あるグループで決定した質問したいこと

3 主体的・協働的な学びを展開するための教員のファシリテーターとしての関わり

教員の役割を、知識を付与する者から、児童の主体性（自己決定）を引き出すファシリテーター（伴走者）へと転換することを試みました。墨田区立二葉小学校主幹教諭である松原大樹先生とのオンラインによる交流でご教授いただき、教員のファシリテーターとしての役割をまとめました。



- ・児童が自身の学びの過程を自ら操縦できる環境づくりを支援すること。
- ・対話や整理の場面では、合意形成を図るためになぜそう考えるのかという根拠（理由）を大切にすること以上を踏まえて、教員がファシリテートすることを意識的に行いました。

<事例（1） 4年生 社会科「住みよいくらしをつくる～水はどこから～」>

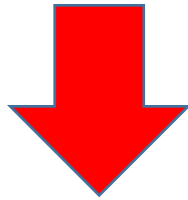
水道施設の見学をして、「どんな工夫が行われていたのか」について個人・グループで思考ツールを用いて考えを整理しました。教員はファシリテーターとして「浄水事業の特徴を捉える」という学習のねらいに迫りました。



個人で思考ツールを使って考えを整理する。



グループで考えを共有し、話し合う。



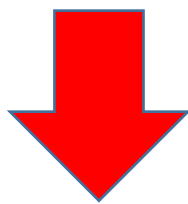
教員が学習のねらいに迫るために児童の言葉や思考を整理していく。

＜事例（２） １年生 算数科「大きなかず」＞

2 位数の構成を理解する学習を、個人で考えた後に、全員で考えを共有し学習をしました。教員がファシリテートして、異なる答えのボードを見ながら、どこが違うのか、なぜ間違えたのかを子供たちが言葉で説明し合い、理解を深めました。



一人一人でカードを使って、考えをまとめる



教員が学習のねらいに迫るために児童の言葉や思考を整理していく。

Ⅲ 分科会より

1 基礎スキル分科会

本校は、情報活用能力育成研究校として、児童が情報を主体的に扱い、学習や生活に生かす力を身に付けることを目指している。その基盤となるのが「基礎スキル」である。基礎スキル分科会では、児童が学年に応じてどのような操作や活用ができるようになるべきかを明確にするために、校内共通の指導モデルを作成した。このモデルを「三宅モデル」と呼び、全学年で一貫性をもって育成する指導の土台（基本的な操作技能）とするものである。

(1) モデル作成の目的

これまでは、教員それぞれの経験や工夫に依存して情報活用能力の指導が行われていたため、学年ごと・児童ごとに習得のばらつきが生じていた。そこで、三宅モデルを作成するにあたり、以下のことを目的とした。

ア 系統性の確立

低・中・高学年の段階に応じた到達目標を明確にし、学年に応じて系統的に指導できるようにする。

イ 指導の見通しの共有

教職員が共通の基準をもつことで、授業で必要な基礎スキルを位置付け、児童の発達段階に応じた適切な指導ができるようにする。

ウ 評価の基準化

「この学年ではどこまでできることを期待するか」を明確にするため、児童の習得状況を把握し、必要な指導や支援を講じることができるようになる。

令和7年度 情報活用能力 #三宅モデル

	低学年	中学年	高学年
Iタイム年間指導計画より	①Chromebookの起動やシャットダウン、ログイン・ログアウトする。 ②オンラインプラスを開く、カードを作る、写真を撮る、挿入する、提出する。 ③オンラインプラスで書き込み、音声入力をする。 ④インターネットで音声入力、書き込みを使って画像検索する。 ⑤Canvaを使ってリンクを共有する。 ⑥2つ以上のキーワードを使って検索する。	①Googleのトップ画面をショートカットを使って整理する。 ②スライドを使う。 ③スライドを共有し、編集作業をする。 ④ClassroomやGoogleドライブを整理する。 ⑤フォームでアンケートをとる。 ⑥ドキュメントを使い、共有する。 ⑦スプレッドシートを使い、共有する。 ⑧ファイルにパスワードをかける。	①アンケートをとる。 ②グラフを作る。 ③プレゼン資料を作る。 ④プレゼン資料を使って発表する。 ⑤スライドを作る。 ⑥スライドを使って発表する。 ⑦Scratchでフィズを作る。
情報機器の基本的な操作技能 (情報の入力)	起動・シャットアウト、ログイン・ログアウト 写真撮影などの基本操作ができる	キーボードで文字入力ができる (3年生:10文字/1分間・4年生:20文字/1分間)	文字入力ができる (30文字程度/1分間)
情報の入力に係るジェネリックスキル	<input type="checkbox"/> 起動・シャットダウン <input type="checkbox"/> ログイン・ログアウト <input type="checkbox"/> キーボード操作(位置・ホームポジション) <input type="checkbox"/> 音声入力 <input type="checkbox"/> 書き込み <input type="checkbox"/> 数字・記号の入力 <input type="checkbox"/> タッチパネル操作 <input type="checkbox"/> タッチペン操作 <input type="checkbox"/> カメラ・ビデオ操作 <input type="checkbox"/> 写真の挿入	<input type="checkbox"/> 入力モード切替(全角・半角) <input type="checkbox"/> 数値入力 <input type="checkbox"/> ローマ字入力 <input type="checkbox"/> 漢字変換 <input type="checkbox"/> 変換候補の選び方 <input type="checkbox"/> 単語の入力	<input type="checkbox"/> 長文の入力 <input type="checkbox"/> 改行、スペース <input type="checkbox"/> コピー <input type="checkbox"/> 貼り付け <input type="checkbox"/> 切り取り
情報機器の基本的な技能 (アプリケーション等の使用・操作)	学習支援アプリケーションを選択・操作できる (オンラインプラス、Classroom、Canva)	オフィス系アプリケーションを選択・操作できる (Googleドライブ、Googleスライド、フォーム、スプレッドシート)	目的に応じてアプリケーションを選択・操作できる
アプリケーション等の使用・操作に係るジェネリックスキル	<input type="checkbox"/> タッチパネル操作:タップ、スワイプ、ピンチイン・アウト <input type="checkbox"/> 動画閲覧ソフト(NHK for school、STEAMLibrary情報モラル) <input type="checkbox"/> 簡易ペイントソフト <input type="checkbox"/> 学習支援ソフト(GIGAワークブックとうきょう)	<input type="checkbox"/> 日本語ワープロソフト(Googleドキュメント、オンラインプラス、Canva) <input type="checkbox"/> プレゼンテーションソフト(Googleスライド、オンラインプラス、Canva) <input type="checkbox"/> ビジュアル型プログラミング言語(算数:4年「平行と垂直」・「四角形」、5年正多角形と円・6年拡大図と縮図)	<input type="checkbox"/> 表計算ソフト:スプレッドシート <input type="checkbox"/> グループウェア(フォームアンケート作成、スプレッドシートからグラフ作成) <input type="checkbox"/> プログラミング言語(Scratch)
情報機器の基本的な操作技能 (検索)	キーワードを入力できる 検索ボタンを押して、検索を実行できる 自分の知りたいことをキーワードにできる	「+」を使って、複数のキーワードを組み合わせて検索できる 関係のない言葉を「-」を使って除いて検索できる	複数のキーワードを「AND」でつなぎ、両方に関係する情報を検索できる どちらかの条件に当てはまる情報を得るために「OR」を使って検索できる
検索に係るジェネリックスキル	<input type="checkbox"/> 画像検索を使って、目的の画像を探せる <input type="checkbox"/> 必要な画像を選んでクリックすることができる <input type="checkbox"/> 関係のない画像に気付くことができる	<input type="checkbox"/> +検索、-検索を使っても目的の情報が見付からないとき、キーワードを見直そうとする <input type="checkbox"/> 検索結果を見比べて、どのような検索語や演算子が効果的だったかを考えることができる	<input type="checkbox"/> ハッシュタグ検索を活用し、話題やテーマの広がりを探ることができる <input type="checkbox"/> 検索方法の違いによって出てくる情報の質や量を比べ、自分の調べたいことに合った方法を選ぶことができる
情報機器の基本的な操作技能 (保存)	ファイルの呼び出しや保存ができる	ファイルの検索ができる	ファイルやフォルダの管理ができる
保存に係るジェネリックスキル	<input type="checkbox"/> Googleドライブなどで指定されたファイルを開く <input type="checkbox"/> 指定されたファイルをGoogleドライブなどに格納・保存する <input type="checkbox"/> 指定されたファイルをClassroom等で提出する	<input type="checkbox"/> ファイルに名前を付けて指定された場所に格納・保存する <input type="checkbox"/> Googleドライブに格納されたファイルを検索して見付ける <input type="checkbox"/> 指定されたファイルをGoogleドライブに格納する	<input type="checkbox"/> 保存場所を選択し、適切に保存する <input type="checkbox"/> 目的に応じて、適切な場所にファイルを移動する <input type="checkbox"/> 必要に応じて、ファイルをコピーしたり削除したりする <input type="checkbox"/> Googleドライブ上でファイルの名前を適切に変更する <input type="checkbox"/> Googleドライブ上でファイルの共有する <input type="checkbox"/> Googleドライブ上でファイルのコピー・削除をする

(2) モデルの活用方法

作成した三宅モデルは、単に一覧として提示するだけでなく、日々の学習活動や校内研修で活用している。

ア 授業実践での活用

低学年では「ログイン・ログアウト」や「写真撮影」などを生活科や国語科で取り入れ、中学年では

「スライド作成」や「クラウドでの共有」を総合的な学習の時間や理科の学習に位置付けている。高学年では、調べ学習や発表活動において「グラフ作成」や「根拠をもった説明」などを強調し、三宅モデルで設定されたスキルを意識的に取り扱っている。

イ 校内研修での活用

各学年部会で授業を提案する際には、三宅モデルに照らして「どのスキルが児童に身に付いているか」「どの部分に指導の工夫が必要か」を検討している。こうした共有により、学年ごとの偏りを防ぎ、児童全体の習得度を高めている。

ウ 児童への提示

児童にも分かりやすい言葉で整理し、「自分たちは今どの力を身に付けているのか」「次の学年ではどんなことができるようになるのか」を伝えることで、自らも情報活用能力を意識して学習に臨み、身に付けられるようにしている。

じょうほう
めざせ！情報マスター ～パソコンスキル～
みやけそんりつ みやけしょうがっこう なまき
三宅村立三宅小学校 名前

管理

Chromebookの使い方や約束が分かるかな

LEVEL 1 Chromebookを大切に扱うことができる

LEVEL 2 インターネットで検索してはいけないことが何かが分かる

LEVEL 3 学校や家庭でのChromebookの使い方や約束が分かる

基本

基本的なパソコン操作を知っているかな

LEVEL 1 Chromebookの起動や終了、写真撮影ができる

LEVEL 2 全角と半角の入力切替や数字入力ができる

LEVEL 3 コピー、切り取り、貼り付けができる

入力

タイピングをどれくらいできるかな

LEVEL 1 自分の名前をタイピングすることができる

LEVEL 2 キーボードでタイピング（30文字/1分間）ができる

LEVEL 3 キーボードでタイピング（60文字/1分間）ができる

選択

アプリの使い分けができるかな

LEVEL 1 先生に言われたアプリを使うことができる

LEVEL 2 オクリンクプラスやCanvaを使い分けすることができる

LEVEL 3 ドキュメント、スプレッドシートやスライドを使い分けすることができる

操作

アプリの操作はどのくらいできるかな

LEVEL 1 ドラッグ、タップ、スワイプ、ピンチイン・アウトができる

LEVEL 2 オクリンクプラスやクラスルームの課題提出ができる

LEVEL 3 スプレッドシートの計算式、Canvaのアニメーションができる

保存

ファイルの保存について理解できているかな

LEVEL 1 ファイルを開いたり、保存したりすることができる

LEVEL 2 フォルダ分けをして、ファイルを保存することができる

LEVEL 3 指定されたドライブのフォルダにファイルを保存することができる

(3) GIGA 検定とうきょうの実施と実態調査

ア 目的

本校では、情報活用能力育成研究校として、児童が一人1台端末を適切かつ効果的に活用できる力を育成している。その一環として実施した「GIGA 検定とうきょう」は、児童の情報活用能力の定着状況を把握し、今後の指導改善に生かすことを目的としている。

イ 内容

GIGA 検定とうきょうは、電子版情報活用能力チェックとして提供され、児童が自分の学習状況を振り返りながら取り組める形式となっている。主な評価項目は以下のとおりである。

- ・情報収集：目的に応じて必要な情報を探し、適切に取り出す力
- ・情報の整理・分析：集めた情報を比較したり整理したりして、考察する力
- ・情報の表現・発信：ICTを用いて自分の考えを分かりやすく伝える力
- ・情報モラル：安全・安心に端末を利用するための判断力

この検定は、情報モラル、情報の扱い方、プログラミング的思考など、ICT活用に関する学習を総合的に位置付ける評価ツールとして活用できるものであり、これらの内容により、児童の情報活用能力を多面的に把握することが可能である。

ウ 実施方法

本検定は、東京都教育委員会が示す手順に基づき、学級ごとに端末を使用して行った。実施にあたっては、検定の趣旨や操作方法を事前に説明し、落ち着いて取り組める環境を整えた。

また、検定後は結果を教員間で共有し、学年や校内での指導改善に結び付けるようにした。児童一人一人の課題と伸びを把握し、今後の授業設計や端末活用場面の工夫に役立てている。

エ 結果・分析

(ア) 分析結果の概要

3年生から6年生を対象に実施した。その結果、タイピング技能については、多くの学級で平均値が目標値を上回っており、継続的な練習の成果が見られた。

一方で、どの学年でも「基本的操作」「情報の科学」「情報の活用」のいずれかの観点で、知識・技能または経験の不足が確認された。

(イ) 観点別の主な課題

① 基本的操作

手紙作成に用いるツールの選択、高度な検索方法（複数キーワードの組み合わせ等）、画像を用いた検索方法、文書の改行方法などの基礎的な知識に課題が見られた。また、ファイルの移動やフォルダ整理などの複雑な操作経験も不足している。

② 情報の科学

AIの利用判断、フェイク画像やフェイクニュースへの注意、ロボットの動きの仕組みなどの理解が不十分である。更に、プログラミングを活用した問題解決経験が全般的に不足しており、特に自分でプログラムを作成した経験が極めて少ない。

③ 情報の活用

相手に伝わる資料作りや発表資料の工夫、情報整理の方法に関する知識が不十分である。また、データの集計やグラフ作成など、目的に応じて情報を整理する経験も不足しており、学年が上がっても十分に身に付いていない状況が確認された。

(ウ) 学年別の傾向

3年生	基本的操作や情報の活用に関する知識が不足しており、特にツールの選択や画像検索、資料作成の基礎に課題がある。プログラミング経験も少ない。
4年生	インターネット検索に関する知識は一定程度身に付いているが、画像検索や文書作成の知識、プログラミング経験が不足している。
5年生	コピー＆ペーストなど基本操作の一部は定着しているが、ツールの選択、効率的な検索方法、プログラム作成経験、情報整理の知識が不足している。
6年生	フェイク情報の見分け方など一部の知識は定着しているものの、複雑な検索方法、AIの判断、情報整理・グラフ作成経験が不足している。

オ 今後の課題

(ア) 基礎的な操作技能の系統的な指導

画像検索や高度な検索方法、文書作成の基本など、学年を越えてつまずきが見られる技能について、年間指導計画の中で繰り返し扱い、活用場面を意図的に設ける必要がある。

(イ) プログラミング的思考を育成する継続的な学習機会の確保

プログラミング的思考を育成する学習を教科横断的に位置付け、「自分で試す」「失敗したらやり直す」「もう一度試す」などの経験を増やすことで、プログラムを活用した問題解決の力を育成する必要がある。

(ウ) 情報モラル・AI リテラシーの育成

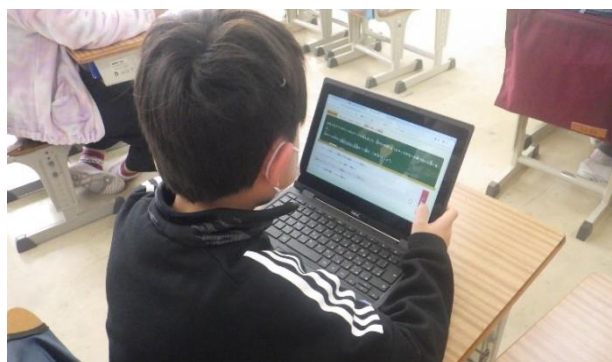
AI の活用判断やフェイク情報への対応については、実際の事例を取り上げながら学ぶ機会を増やし、情報を批判的に捉える力を育てる必要がある。

(エ) 情報の整理・発信の学習機会の強化

データの集計、グラフ作成、発表資料作りなどは、総合的な学習の時間や各教科の調べ学習と連動させながら年間を通して経験させることで、実践的な情報活用力能力の向上が期待できる。

(オ) 学年を越えた系統性の再構築

学年ごとの課題を踏まえ、学校全体で育てたい情報活用能力を共有し、指導の系統性を再確認することが必要である。特に、児童がつまずきやすい領域については、学年間で共通の教材・学習活動を取り入れるなど、全校体制での取り組みが求められる。



学級ごとに端末を使用して「GIGA 検定とうきょう」を行った

(4) 成果と課題

ア 成果

本年度の取組により、基礎スキルの系統性を全校で共有でき、授業の中で意識的に取り扱うことが可能となった。また、検定によって児童の実態を客観的に把握できたことは大きな成果である。

イ 成果

三宅モデルを日常の授業にどう組み込むかは、担任の力量に左右される部分が多いことが課題として挙げられる。また、情報モラルや安全に関する指導は、一度の授業で定着するものではなく、継続的に指導する必要がある、入力スピードや正確性など、児童による習得の個人差をどう支援するかが課題である。

(5) 次年度への展望

今後は、以下の方向で取組を発展させたい。

ア 三宅モデルの改善

児童の習得状況や検定結果を踏まえて、指導事項を精査し、より実態に即した内容に更新していく。

イ 授業デザインへの統合

総合的な学習の時間や各教科において自然にスキルが積み重なるよう、単元計画と三宅モデルを連動させる。

ウ 校内研修の充実

授業実践を通じた研修を重ね、全教職員が自信をもって基礎スキル指導を行えるようにする。

基礎スキル分科会としては、今後も「三宅モデル」を軸に全校体制で指導を継続し、児童が「情報を正しく選び、効果的に活用し、安心して発信できる力」を着実に身に付けられるよう、取り組みを推進していきたい。

2 情報活用スキル分科会

本校は、情報活用能力育成研究校の指定を受け、児童一人一人が目的や意図に応じて情報を適切に扱い、主体的・協働的に学ぶ力の育成を目指して研究を推進した。

情報活用分科会では、授業実践を中心に扱う授業分科会や、基礎的技能の習得を扱う基礎スキル分科会と連携しながら、児童及び教員の情報活用能力の実態を把握・分析し、本校において重点的に育成すべき観点を明らかにする役割を担った。

研究構想図に示すとおり、本分科会は研究全体の土台となる情報活用能力について「実態把握」と「視点の整理」を通して、校内研究を支えることを目的とした。

(1) 研究の視点（情報活用能力の捉え方）

本分科会では、学習指導要領に示されている「情報活用能力は学習の基盤となる資質・能力である」という考えを踏まえ、単なる ICT 操作技能にとどまらず、課題設定から情報の収集・整理、比較・関連付け、表現、振り返りに至る一連の学習過程を支える力として情報活用能力を捉えた。

特に本校の研究主題である「主体的・協働的な学び」との関係性を重視し、情報を介して他者と考えを共有し、高め合う場面において、児童がどのように情報を扱っているかという視点から分析を行った。

(2) 実態把握の方法と結果

ア 実態把握の方法

児童及び教員の情報活用能力の実態を把握するため、アンケート調査を実施した。

児童アンケートでは、情報の集め方やまとめ方、友達との話し合いにおける ICT 活用に関する意識や自己評価を中心に質問項目を設定した。

教員アンケートでは、日常の授業における ICT 活用の状況や、情報活用能力を育成する上での得意な点・課題意識について調査した。

イ 実態把握に基づく課題の整理と分科会の方向性

本分科会では、研究の方向性を明確にするため、5月に教員及び児童を対象とした情報活用能力に関するアンケート調査を実施した。情報活用能力育成研究校としての取組を進めるにあたり、教員と児童それぞれの実態を把握し、その共通点や課題を明らかにすることが必要であると考えたためである。

アンケート調査では、情報の収集・判断・整理・分析・表現・発信、情報倫理といった観点から、日常の学習や指導における意識や実践の状況を把握した。これらの結果を分析することで、本校において重点的に育成すべき情報活用能力の観点を整理し、本分科会としての研究の方向性を定めることを目的とした。

ウ 児童の実態

本校では、児童の情報活用能力の実態を把握するため、5月及び12月にアンケートを実施した。アンケートは、「情報収集力」「情報の判断力」「情報の整理・分析力」「情報の表現・発信力」「情報倫理の理解」の5観点から構成し、学年ごとの変容を分析して整理して分析した。

観点	低学年	中学年	高学年
情報収集力	身近な人や本から得る	ネットの便利さに気付く	複数の手段を使い分ける
情報の判断力	直感や身近な人を信頼	発信元を意識し始める	複数の比較、リスクを想定
情報の整理・分析力	紙媒体が中心	表やグラフの活用	デジタルと紙の使い分け
表現・発信力	短く簡単に伝える	スライド等の視覚化	相手の反応を意識した発信
情報倫理の理解	決まりを守る	危険に気付く	リスクを判断

情報収集力については、低学年では本や家族など身近な人から情報を得る傾向が強く、インターネット検索は補助的な手段にとどまっている様子が見られた。3年生になると、インターネットの便利さに気付き始め、4年生以降は情報量や分かりやすさといった特性を踏まえて収集方法を選択する姿が増えている。5・6年生では、インターネットと本、家族など複数の手段を組み合わせ活用する児童が多くなり、目的に応じた情報収集が定着しつつあると考えられる。

情報の判断力については、低学年では家族や教員への信頼が高く、自身の感覚で判断する傾向も見られた。3年生では、情報の正しさを疑い、確かめようとする意識が芽生え、4年生以降は情報の発信元によって信頼度が異なることに気付き始めている。5年生からは、複数の情報を比較して判断する姿が見られ、6年生では、誤った情報を広めてしまう危険性にも意識が向くようになっている。

情報の整理・分析力では、2年生はノートやメモといった紙媒体を中心に活用し、友達と協力してまとめる良さに気付いている。一方、3年生ではデジタルツールの利便性に気付き始め、4年生以降は表

やグラフなど、伝わりやすさを意識した整理の方法が増えている。5・6年生では、デジタルの効率性や扱いやすさを理解し、目的に応じて紙とデジタルを使い分ける姿が見られた。

情報の表現・発信力については、低・中学年では「誰にでも分かるように」「簡単に短く伝える」ことを意識した回答が多かった。4・5年生からは、スライドや図表など視覚的な表現を用いる意識が高まり、6年生では、自分の考えを加えたり、相手の反応を意識したりするなど、より高度な発信を意識する児童が増えている。

情報倫理の理解では、学年が上がるにつれて、写真の扱いやアカウント管理、SNSの利用に関する意識が高まる傾向が見られた。低学年ではSNS利用経験が少ないことから関心が低い一方、高学年では具体的なリスクを想定した判断ができるようになってきている。

以上のことから、情報活用能力は学年の進行とともに段階的に高まり、特に高学年において複数の力が結び付きながら伸長していることが分かる。本校の取組は、児童の発達段階に応じた情報活用能力の育成に一定の成果を上げていると考えられる。

エ 教員の実態

本分科会では、教員の変容を「意識」と「実践」の両面から分析した。年度を通して、教員集団の資質能力は「概念的理解」から「授業改善への直接的活用」へと大きく進化を遂げている。

まず、情報の収集力については、年度当初から一定の水準が見られ、授業や学級経営に必要な情報を主体的に収集しようとする姿勢が定着していた。12月には、従来のインターネット検索や書籍に加え、ICTツールや生成AIを補助的に活用するなど、目的に応じて複数の手段を併用しようとする傾向が一部に見られるようになった。一方で、外部専門家やネットワーク型の情報源の活用は限定的であり、情報源の更なる多様化が課題として挙げられる。

情報の判断力については、情報の信頼性に対する高い意識が、実際の授業準備における「複数資料の照合」という具体的な行動として定着した。12月の調査では、判断の視点自体に大きな変化は見られないものの、実践の中で実際に確認・比較を行う事例が増加しており、情報の質を重視する姿勢が行動として定着しつつあることがうかがえた。また、生成AI等の新たなツールの導入に伴い、情報の真偽を確かめる「判断」への意識が、単なる知識から「授業準備における必須の工程」へと行動化した。

情報の整理・分析力については、当初は活用方法を模索する段階にあったが、12月にはICTを用いたデータの可視化や、実践事例の比較検討を通じた客観的な授業改善へと結びつくようになった。5月には、情報を整理・分析する必要性は感じているものの、方法や視点が十分に意識化されていない状況が見られた。12月には、表やグラフを用いた可視化や、複数の教材や実践事例を比較して授業改善に生かすなど、ICTを活用した整理・分析の実践が増加した。情報を単に集める段階から、指導改善に結び付けて活用する段階へと意識と行動が移行していることが確認された。

情報の表現・発信力については、相手意識や分かりやすさを重視する姿勢が年度当初から見られ、12月には校内研修や会議等で情報を発信する機会が増加した。資料やスライドを用いて実践を共有する事例も増え、教員間の学び合いが広がっている。一方で、発信に対する心理的なハードルを感じている教員も依然として存在しており、誰もが安心して発信できる場づくりが今後の課題である。

情報倫理については、実践の深化に伴い、著作権や肖像権の扱いにおける具体的な課題が顕在化した。これは、教員の意識がより実践的なレベルへ到達した証左といえる。

以上のことから、本校教職員の情報活用能力は、年度を通して「意識はあるが実践に結び付きにくい段階」から、「場面に応じて活用し、指導改善に生かそうとする段階」へと質的な向上が見られた。一方で、判断や整理・分析の視点を共通化し、より意図的・体系的に情報活用能力を高めていくことが、今後の課題として明らかになった。

(3) 実態分析から見えてきた重点課題

5月及び12月に実施した児童・教員アンケートの分析から、本校における情報活用能力の現状と成果、そして今後重点的に取り組むべき課題が明らかになった。

まず、児童の実態からは、学年の進行に伴い、情報収集から判断、整理・分析、表現・発信へと、情報活用能力が段階的に高まっていることが確認された。特に高学年では、複数の情報源を比較したり、相手を意識して表現したりするなど、各観点が相互に結び付きながら伸長している。一方で、低・中学年においては、情報を「得る」段階にとどまり、整理・分析を通して自分の考えを形成する経験が十分とは言えない実態も見られた。このことから、発達段階に応じた系統的な指導の必要性が改めて明確になった。

また、教員の実態からは、情報活用能力に対する意識は年度当初から高い水準にあったものの、実践への結び付きには課題があったことが分かった。しかし、分科会の取組を通して、12月には情報を整理・分析し、客観的根拠に基づいて授業改善に生かそうとする姿が広がり、教員集団としての質的な変容が見られた。一方で、判断や整理・分析の視点は個々の教員に委ねられている部分も多く、共通理解として十分に体系化されているとは言えない状況も明らかになった。

これらの分析結果を踏まえると、本校における重点課題は次の3点に整理できる。

1つ目は、児童が情報を整理・分析し、自分の考えを形成する場面を意図的に設定することである。

2つ目は、教員が情報活用能力を「指導の視点」として共通に捉え、授業改善に生かすための枠組みを整えることである。

3つ目は、児童と教員双方の情報活用能力が相互に高まり合うよう、校内での実践共有や対話の場を継続的に保障することである。

情報活用能力は、個別の技能として身に付くものではなく、日常の学習や授業改善の積み重ねの中で育成される力である。本校では、これらの重点課題を踏まえ、分科会相互の連携を図りながら、主体的・協働的な学びを支える情報活用能力の育成に取り組んでいく。

(4) 分科会としての取組と工夫

本分科会では、アンケート結果や分析内容を校内で共有し、情報活用能力を育成する上での共通理解を図った。

その中で、特に、「整理・分析力」に焦点を絞り、その中でも思考ツールの活用法について、分科会から紹介したり、教員間で共有したりできるようにした。具体的には、授業などで思考ツールを活用した事例を共通掲示板に入力し、他の教員も実践、活用できるようにした。掲示板には、単元名やねらい、思考ツールだけでなく、活用した実際の感想やおすすめ度、写真も記録することで、教員の意欲や実践力を高めていくようにした。教員が様々な学習活動を通して思考ツールを活用する機会を設けることで、児童に情報を整理したり分析したりする必然性を与えることにつながると考えた。そのうえで思考ツールの有用性に気付かせたり、自分なりに工夫する楽しさに気付かせたりすることを目指した。



掲示板に蓄積された実践事例からは、発達段階や学習内容に応じた多様な思考ツールの活用が見られた。例えば、第3学年や第4学年の国語科では、ベン図を用いてポスターや登場人物の心情の共通点・相違点を整理したり、クラゲチャートで文章から読み取った情報を可視化したりする取り組みが報告された。また、道徳科や委員会活動においては、フィッシュボーンを活用することで、自己の多面的な理解や学校課題の要因分析など、複雑な情報を多角的な視点で捉える活動が行われた。

これらの記録からは、「あらかじめ大骨(項目)を設定しておくことで児童が書きやすくなる」といった具体的な手立てや、「目的に応じてアナログとデジタルを使い分ける」といった、実践を通じた教員の気付きも共有された。このように、活用事例を可視化し互いに参照し合える環境を整えたことで、各教員が単元のねらいに応じた最適なツールを選択し、児童が情報の関係性を構造的に捉えられるよう支援する実践力が蓄積されていった。

また、各分科会との連携として、授業研究分科会に対しては、児童の思考や話し合いを支えるICT活用の視点を提案した。基礎スキル分科会とは、基本的な技能と教科学習とのつながりについて情報共有を行った。

これにより、教員一人一人が情報活用能力を意識して授業を構想する土台づくりにつなげることができた。

(5) 成果と課題(分科会の視点から)

ア 成果

アンケート結果の分析により、児童及び教員の情報活用能力の実態が可視化された。これにより、本校が重点的に取り組むべき指導の方向性が明確になった。特に、ICTを「調べるための道具」から「思考を深め、表現するための道具」へと昇華させるための具体的な手立てを共有できたことは大きな成果である。

イ 課題

児童が情報を収集・判断する際の「質の保証」や、各教科の特性に応じた情報活用スキルの系統的な育成が課題として挙げられる。次年度に向けては、教育課程の中にこれらのスキルをいかに位置付けるか、カリキュラム・マネジメントの視点から検討を継続していく。

(6) 次年度への展望

次年度は、本年度明らかになった重点課題を踏まえ、情報活用能力の育成をより具体的な授業改善につなげていくことが求められる。そのために、各教科の単元計画の中に、どの情報活用スキルを組み込むかを明示していくようにする(カリキュラム・マネジメント)。

情報活用分科会としては、引き続き実態把握と分析を基盤とし、授業研究分科会や基礎スキル分科会との連携を深めながら、主体的・協働的な学びを支える情報活用能力の育成に取り組んでいきたい。

3 授業研究分科会

第5学年 総合的な学習の時間 学習指導案

令和7年4月30日(水)
三宅村立三宅小学校
第5学年1組 13名
授業者 小林 哲也

- 1 単元名 三宅の魅力、未来の三宅(50時間)
小単元①「三宅島観光大使プロジェクト」(20時間)
小単元②「未来の三宅プロジェクト」(30時間)

2 単元の目標

【知識・技能】

○三宅島の自然環境に関する疑問や課題を解決するために、学習や情報に関する必要な知識及び技能を身に付けるとともに、学んだことや体験したことから、自分と地域社会との関わりについて理解する。

【思考力・判断力・表現力】

○三宅島の自然環境に関する疑問や課題を解決するために、計画を立て、収集した情報を整理・分析し、目的や相手に応じた工夫をしてまとめ、適切な手段を検討して表現することができる。

【学びに向かう力・人間性等】

○探究的な学習に主体的・協働的に取り組み、自然環境について学んだことを基に、地域社会との関わり方や生き方について考え、すすんで自らの生活に生かそうとしている。

3 単元の評価規準

観点 評価	知識・技能	思考・判断・表現力	主体的に学習に取り組む態度
単元の 評価規準	①三宅島の自然環境に関する活動の中で、学んだことや考えたことから、自分と地域社会との関わりについて理解している。(知識) ②目的や対象に応じて、調査活動を適切に実施している。(技能)	①三宅島の自然環境について考える学習活動の中で、自分の課題をつくり、解決の見通しをもっている。(課題設定) ②課題解決に必要な情報を様々な手段を講じて幅広く収集し、蓄積している。(情報の収集) ③課題解決に向けて、観点に合わせて情報を整理し、分析することで考えを深めている。(整理・分析) ④相手や目的に応じて、分かりやすく表現している。(まとめ・表現)	①三宅島の自然環境に関する疑問や課題を解決していく過程で、自己の有用性に気付き、探究活動にすすんで取り組もうとしている。(自己理解・主体性) ②自分と違う意見や考えのよさを生かしながら協働して学び合おうとしている。(協働性・他者理解) ③家庭や地域社会との関わりの中で学んだことを自身の生活に生かそうとしている。(将来展望)

4 指導観

(1) 単元観

本単元は、三宅島の自然環境をテーマに探究学習を行う。三宅島には、海や山、多種多様な動植物など自然豊かな環境がある。また島の自然環境と立地を活かした農業、漁業、観光業が主として存在する。島という環境のため、児童にとっては、自然を身近に感じることができている。本単元では、三宅島の「ヒト・コト・モノ」に触れながら、魅力や情報を集めていく中で登場する課題などを多面的・多角的な視点で捉え、地域への愛着を高めるとともに、これからは三宅島の自然の美しさを「守りたい」「より高めたい」と感じ、自分が未来の三宅を担う担い手の一人であることを自覚し、行動に移していくことをねらいとしている。

小単元①では、「三宅島観光大使プロジェクト」として、様々な情報収集の手段、体験活動を用いて三宅島の魅力を広げていく。情報を集める手段としては、①児童の考え(生活体験)②本やインターネット、映像資料③インタビュー(アンケート)④フィールドワークを想定している。児童の考える魅力を挙げ、生活、

生態系、防災、伝統文化、観光、産業などの分類に整理し、その中の自然環境に関する魅力を「広げたい」「伝えたい」という思いをもつことからゴールイメージをもつ。小単元①では、魅力を伝えるパンフレット作りや広報活動をしていくことで、児童の故郷を愛する心を高めていく。

小単元②では、「未来の三宅プロジェクト」として小単元①でまとめた情報から、側面として存在する課題（継続していくことが難しい問題）や要因（誰かの活動のおかげで継続できていること）を考え、三宅島の自然の美しさを「守りたい」「より高めたい」という単元のめあて（ゴールイメージ）をたて、そこに携わるヒト・コト・モノや、他の自治体の事例などの情報を集め、自分たちでできることはどんなことかを探究し、行動に移していく。

なお、単元名は仮としている。学習を進めていく過程で、児童とともに単元名を決めていき、児童主体となって学習を進められるようにしていく。

(2) 児童観

本学級の児童は、4年生までの学習で、「三宅島は自然豊かな島である」という認識をもっている。また、島で生まれ育った児童が多く、自分の生まれ育った三宅島に愛着をもっている。

学習においては、学級の中で発表したり、話したりすることができる児童が多いが、課題に対して深く考えたり、友達の意見を聞き入れ、協働的に学んでいったりすることが苦手な傾向がある。

本単元を通して、学級の友達、保護者、地域、行事、自然との出会い、体験活動を通して、故郷三宅島への思いを高めたい。そして、そこから出てきた自分の思いのこもった言葉で友達と伝え合い、協力して学びを深める経験を通して、友達を尊重する心を養い、故郷である三宅島の良さを再認識し、自分も未来の担い手の一人であることを自覚する気持ちを育てていく。

5 目指す児童像

自分の考えをもち、友達の意見を認め合い、学びに生かせる子

児童の実態を踏まえて、第5学年における「互いの考えや思いを認め合い、主体的に学びを深める子」を「自分の考えをもち、友達の意見を認め合い、学びに生かせる子」とした。

各教科では、単元ごとに既習事項や現状を踏まえた課題設定を繰り返すことで、自分事となる課題設定ができるようになることをねらいとする。また、各教科の単元の後半にあるまとめ・表現する活動では「目的意識」や「相手意識」をもち、成果物を作成できるような単元づくりをする。以上を繰り返していくことで上記の児童像に迫っていく。

6 研究主題に迫るための工夫

(1) 郷土愛を高める単元づくり

「環境」をテーマに考えた際に、SDGsが一つのキーワードとして考えられる。「環境問題」をテーマとして学習展開をしていく際に、三宅島のネガティブなイメージが大きくなってしまうことが懸念される。そこで今回の単元計画では、小単元を2つに分け、小単元①のゴールを「三宅島観光大使プロジェクト（仮）」とし、三宅島のポジティブな面に目を向けていく学習展開をねらう。そうすることで、自分たちの住む三宅島への思いを高め、小単元②の学習でそんな三宅島の魅力を守っていききたい、より高めていききたいという思いをもたせることをねらいとしている。

(2) 地域人材と環境を生かした学習展開

情報を収集していく際に、保護者や地域の産業に携わる専門性の高い「ヒト」との出会い、島内の自然体験や伝統的な祭りなどの「コト」との出会い、フィールドワークなどにおいての自然の「モノ」との出会いを学習過程の中で多く設定し、子供たちが五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）を使って、情報を収集できるようにする。そうすることで児童が真に感じた思いに深まりが生まれ、それを共有したときに、互いの思いを認め合い、共に学んでいこうとする気持ちが育つことをねらいとしている。

(3) 児童の「もっと」から育つ情報活用能力

学習を進めていく中で、児童のもっと「～したい」という思いを形にするための、様々な情報活用能力が存在する。単に知識を教えるのではなく、学習過程の中で、児童が学ぶことへの必然性が生まれたときに、必要な情報活用能力を身に付けさせることを心掛ける。ただし、基本的なタイピング技能やツールの活用などは、授業だけでなく、Iタイムなどの朝の時間や教科学習でも積極的に行っていく。基となる指標は、情報活用能力#東京モデルを利用し、三宅島の児童の実態を踏まえた系統的な指標に変え、三宅オリジナルの指標の作成を計画する。

(4) 日常的な取組

①教科学習における協働学習と根拠をもつことの習慣化

教科学習において日常的に自分の考えをもち、友達と意見交流をして発表する機会を設定する。意見を伝える際には必ず「根拠（理由）」を伝えるようにすることで、説明をする力、考えを聞く習慣、良いものを考える目を養う活動をする。

②プレゼン能力の向上と情報整理能力の向上をねらいとした自由学習

1週間ごとにテーマを問わない自由学習プレゼンテーション資料の作成を課題としている。作成した資料を学級またはグループ単位で発表し、発表の仕方や内容について投票を行うコンテスト形式で実施する。相手意識、目的意識をもったプレゼンテーション資料の作成能力の向上と、友達の良いところを取り入れようとする心、発表する習慣を身に付けられるようにする。

(5) 単元を学習するために必要な情報活用能力 (情報活用能力Ⅱ東京モデル Ver1.0 より)

基礎スキル	情報活用スキル
<ul style="list-style-type: none">・タイピング入力（30文字/1分間）・目的に応じたアプリケーションの選択、操作（オクリンクプラス・Google・Canva）・情報検索（複数キーワードを用いた）能力・（ファイル共有のための）ファイルの管理	<ul style="list-style-type: none">・調査の設計、情報を適切に収集・検証・表やグラフを用いた情報整理（オクリンクプラス・Google・Canva）・複数の情報の傾向や変化を捉える力・相手や目的に応じた情報の発信・交信・情報活用の効果を見出せる力
プログラミング	情報モラル・情報セキュリティ
<ul style="list-style-type: none">・見通しの手順をフローチャートなどで表現	<ul style="list-style-type: none">・情報に関する自他の権利・情報が正しいかどうかの判断・情報の権利を守るための適切な行動・情報や情報技術をよりよい生活や社会づくりに生かそうとする思考

7 小単元計画（20時間）

学 習 過 程	時	学習活動	指導上の留意点	評価
課 題 設 定	1 ～ 4	<p>○三宅島の魅力を広げよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三宅島の魅力について情報を集め、分類して、整理する。 ・本やインターネット、アンケート、保護者や地域の人へのインタビュー <p>○情報の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三宅島には大きく分けて、自然環境を生かした「農業」、「漁業」「観光業」の3つがあることに気付き、その良さを見付け、単元の目標を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元を通して児童の思いをよく聞き、学習活動は柔軟に変更していく。 ・3・4年生で学習していた内容を想起させ、「自分たちが住んでいる三宅島はこんなにも魅力的なところなのだ」という思いを高める。 ・児童の思考をまとめたり、比較させたりする、ICT ツール、思考ツールを積極的に活用して、児童の情報活用能力を育成させる。 (教員→児童) 	<ul style="list-style-type: none"> ・三宅島の自然環境に関する活動の中で、学んだことや考えたことから、自分と地域社会との関わりについて理解している。(知識)【知・技】 ・課題の解決に必要な情報を様々な手段を講じて幅広く収集し、蓄積している。(情報収集)【思・判・表】
見 通 し <本時>	5	<p>○想定される単元の目標</p> <p>「三宅島のすてきなところを自分の言葉でもっとみんなに知らせたい。」</p> <p>○想定される課題</p> <p>「どんな言葉やものを発信していこうかな。」</p> <p><見通し></p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門家の人にどんな活動を行っているのか話を聞きたい。 ・誰に知らせたいのか。(相手意識・目的意識) ・どのように知らせるのか。(表現の方法) 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元のねらいに沿った人材や、体験を取り入れ、多面的・多角的な視点で課題を捉えられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・三宅島の自然環境について考える学習活動の中で、自分事の課題をつくり、解決の見通しをもっている。(課題設定・見通し)【思・判・表】
情 報 収 集	6 ～ 13	<p>○課題の現状を調査しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門家からの話（農業、漁業、観光協会、支庁産業課等、各産業の専門家） ・他の自治体との比較調査（三宅島の強みを理解する。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査活動の都度、グループをつくり、友達と協力しながら、協働的に学んでいけるようにする。 ・集まった情報には、問題も多く出てくることが想定されるが、単元の目標を適宜確認し、「魅力」に目を向けさせる。ただし、課題は蓄積し、単元②で活用できるようにしておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的や対象に応じて、調査活動を適切に実施している。【知・技】
整 理 分 析	14 ～ 18	<p>○学んだことを相手意識・目的意識をもって、協働して整理していく（プレゼンテーション資料、Canva、等、模造紙、その他 ICT ツール）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表のための準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような形で表現していくのか、目的をもち、手段のために ICT などの必要なツールを選択させる。(✕Canva を使いたい、○～がしたいから Canva を使う) ・発表する対象は、児童と話し合い、柔軟に対応する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決に向けて、観点に合わせて情報を整理し、分析することで考えを深めている。(整理・分析)【思・判・表】
説 明 ま と め	19	<p>○三宅の魅力が詰まった資料を紹介しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表会（対象は、保護者または地域の人を想定。） 		<ul style="list-style-type: none"> ・相手や目的に応じて、分かりやすく表現している。(まとめ・表現)【思・判・表】

振り返り	20	○単元①の振り返り <ul style="list-style-type: none"> ・三宅島がもっと好きになった。 ・三宅島の魅力を更に知れた。 ・これからの三宅島はどうなっているのだろう。 ・自分にできることを見つけない。 	・「地域を愛する心」を高めるとともに、これからの三宅島（単元②につながる）を考えた振り返りができるように視点を整理する。	・三宅島の自然環境に関する疑問や課題を解決していく過程で、郷土愛の高まりに気づき、探究活動にすすんで取り組もうとしている。（自己理解・主体性）【学】
------	----	---	--	--

8 本時の指導（5／20時間）

（1）本時の目標

事前に保護者や地域の人にインタビューしてきたことや、自分の生活から感じていることを基に課題を設定し、立てた目標に向かって、主体的に活動するために見通しをもつ。

（2）本時の展開

	学習活動	T:教員の主な発問 C:児童の反応	○留意点 ◎評価【方法】
導入 (5分)	1 前時の振り返りをし、本時の見通しをもつ。 単元目標 三宅島のすてきなところを自分の言葉でもっとみんなに知らせたい。		○前時までに話し合ったことを基に、本時の進め方を児童と確認する。
	めあて 単元の見通しをもち、計画をたてよう。		
展開 (35分)	2 目標に向かうために必要なことを整理する。 T:自分の言葉でみんなに知らせるために、どんな準備が必要かな。 C:最後に知らせることをしないとイケない。 C:どうやって知らせようかな。 C:知らせるためにはまとめないとイケないね。 C:どうやってまとめようかな。 3 個人で今後の活動を考え、見通しをもつ。 4 グループごとにどのように学習を進めていくか、項目とその根拠を考える。(個人→グループ) C:自分の言葉でまとめるには、もっと詳しく知らないといけないのではないかな。 C:詳しく知るためには、専門的な人に聞くと良いかな。 5 全体で共有する。 C:ゴールを決めて、逆算してやることを決めていきたいな。 C:どんな人に聞いたり調べたりすると良いかな。		○オクリンクプラスのフローチャートを活用しながら、どのような準備が必要か視覚的に分かるようにする。 ○オクリンクプラスを活用し、自分の考えを簡単に移動できるように準備をする。 ○個人で考えをもった後、グループで意見共有をする。友達の意見に納得できたら自分の考えを変えても良いことを伝える。(オクリンクプラスの「みんなのボード」を活用) ○具体的に活動をイメージしながら活動の見通しをもてるように、根拠をもたせ、意見交流させる。 ◎三宅島の自然環境について考える学習活動の中で、自分事の課題をつくり、解決の見通しをもっている。(思・判・表)【振り返り・発言】

まとめ (5分)	6 本時の振り返りをする。 T：単元の見通しや目標がもてましたか。次回、より具体的なことを決めていきましょう。	○話し合ったことを教室掲示していき、視覚化することで、自分たちでどのように学習が進むのかを把握できるようにする。
-------------	--	--

9 授業観察の視点

- (1) 児童が主体的になるための単元設定と教員の関わりはどうだったか。
- (2) 本単元の学習計画を進めていく上で、土台となる基礎的なスキルは適切だったか。不足がある場合は、どのようなものがあり、今後はどのようなスキルが必要だと考えられるか。
- (3) 本時のオクリンプラスを使った情報共有の活用は適切であったか。またよりよい情報活用の方法や手立てにはどのようなものが考えられるか。

10 指導講評

○子供の可能性を信じ「あずける」教育への転換

三宅小学校の子供たちは、教員が思っている以上にアイデアが豊富で、自発的にタブレットを活用し、対話から学びを作り出す力をもっている。教員がすべてをコントロールしようとせず、もっと子供たちに学びを預けて良い。

○主体性の本質は「やってみよう！」という意欲

学びにおいて最も大切なのは、論理的な理由よりも「やってみたい！」という主体的な精神である。間違えることは最大の学びのチャンスであり、それを許容し合える「学びのコミュニティ」をどう作っていくかが重要である。

○教員は「知識の伝達者」から「伴走者」へ

ICT を使うこと自体が目的ではない。ICT はあくまでツールであり、それを使って子供たちがどう変容したかが問われる。教員の役割は、解き方の決まった問題を教えることから、子供が自ら問いを立てる過程を支えるコーディネーターやコーチ、伴走者へと変わるべきである。

○「見通し」を立てることで児童を学びの主役に

学習の最初に「見通し」を立てることは、子供自身が自分の学びを操縦することに他ならない。「これまでの学びとつなげる」「ゴールを知る」「取り組み方を決める」という3か条を意識させ、児童が自ら航路を描けるようにすることが不可欠である。

○対話的な学びが育む多様な資質・能力

仲間との対話や相互評価は、教える側にとっても高い学習効果があり、自己評価や内省を促す。伝える力、聞く力、合意形成する力といった資質・能力は、こうした協働的な学びのプロセスを通じてこそ豊かに育まれる。

○学びのポートフォリオによる成長の可視化

目に見える知識や技能だけでなく、思考力や判断力、学びに向かう力といった「目に見えにくい成長」を、ICT を活用したeポートフォリオなどで蓄積していく。6年間を見据えて、学びの足跡を残し、子供が自らの成長を実感できる仕組みを整えてほしい。

○ICTを「日常の道具」として使い倒す

ICT は特別なものではなく、鉛筆や消しゴムと同じ当たり前の道具として普段の授業で活用すべきである。その上で、ICT ならではの「気付き」や「対話の深化」というプラスアルファを追求することが、深い学びへとつながる。

情報の整理や分析は、目的地までの地図を自分たちで描くようなものである。単に最短ルートを教えるのではなく、迷い、相談し、納得して進むべき道を決める経験こそが、子供たちを「自律した学び手」へと成長させる。

1 1 成果と課題

成果

- ・ ローマ字入力やオクリンクプラスの基本操作に慣れたことで、スムーズに学習を進めることができた。
- ・ 教員が児童の言葉を拾いながらオクリンクプラスに入力するなど、教員の支援により児童が主体的に参加できる場面が作られた。
- ・ 話し合いの場にホワイトボードの選択肢を用意するなど、個人またはグループの取り組みやすさがあった。

課題

- ・ 話し合うべき視点を見付けるのに時間を要したため、ICT を活用して話し合いの焦点をより明瞭にする工夫が必要であった。
- ・ 教員が意見を入力する際に児童の待ち時間が生まれており、待ち時間を解消する工夫が必要であった。
- ・ グループ活動において、メンバーの考えを 1 枚のシートに集約するなど、考えの比較や相互理解を深める工夫が更に求められた。

第4学年 社会科 学習指導案

令和7年6月11日(水)
三宅村立三宅小学校
第4学年1組 18名
第4学年しいのき学級 1名
授業者 吉川 敬祐

1 単元名 住みよいくらしをつくる～水はどこから～

2 単元の目標

飲料水などを供給する事業について、供給の仕組みや経路、都内外の人々の協力などに着目して、見学・調査したり地図などの資料で調べたりしてまとめ、それらの事業が果たす役割を考え、表現することを通して、安全で安定的に供給できるように進められていることや、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解できるようにするとともに、学習問題を主体的に追及・解決し、学習したことを基に自分たちが協力できることを考えようとする態度を養う。

3 単元の評価規準

観点 評価	知識・技能	思考・判断・表現力	主体的に学習に取り組む態度
単元の 評価規準	①供給の仕組みや経路、都内外の人々の協力などについて、見学・調査したり資料で調べたりして必要な情報を集め、読み取り、飲料水の供給のための事業の様子を理解している。 ②調べたことを白地図や図表、文などにまとめ、飲料水を供給する事業は、安全で安定的に供給できるように進められていることや、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解している。	①供給の仕組みや経路、都内外の人々の協力などに着目して、問いを見出し、飲料水の供給のための事業の様子について考え表現している。 ②飲料水供給のための事業に見られる仕組みや人々の協力関係と地域の人々の健康や生活環境を関連付けて、その事業が果たす役割を考えたり、学習したことを基に節水するために自分たちが協力できることを考えたり、選択・判断したりして、適切に表現している。	①飲料水を供給する事業について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。 ②よりよい社会を考え、学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断しようとしている。

4 指導観

(1) 単元観

本単元は、地域の人々にとって欠かすことのできない「飲料水」についての学習である。水道事業が計画的・協力的に進められていることを、実際の見学や資料を活用した調べ学習を通して理解し、人々の健康な生活や良好な生活環境の維持・向上にどのように役立っているのかを具体的に考えていく。

特に今回は、東京都と三宅村の水道事業の違いや共通点に着目し、それぞれの施設の役割や、そこで働く人々の思いを調べることで、地域への理解を更に深めることをねらいとする。

また、「まとめる・いかす」の学習段階では、水道事業についての新聞作りに取り組む。この学習を通して、児童が考えたことを自分なりの言葉で書き、思考力・判断力・表現力を高めることをねらいとする。更に、新聞の中で「節水」についての自分なりの考えをまとめ、選択・判断し、実生活の中で主体的に行動する姿勢や態度の育成を目指す。

(2) 児童観

本学級の児童は水道のある生活を当然と感じている。三宅村における水の利用実態（簡易水道や飲料水の確保方法）についても深く意識はしていない。しかし、実際には水道水を飲料として利用していない児童も多く、ペットボトル水や濾過機器を用いている現状がある。また、水道管の老朽化等で断水になることがあり、身近な問題として学習に取り組ませる意義がある。

児童は明るく元気で活動的である一方、学習面では個人差が大きく、特に情報の読み取りや、活用の力に差が見られる。資料を一人で読み解ける児童もいるが、教員の支援が必要な児童もいる。そのため、ペア学習やグループ学習を取り入れ、「誰と学ぶか」を選べるようにしている。また、Chromebook や資料を活用した探究学習

では、情報の量に配慮し、理解を支援する工夫を取り入れている。

5 目指す児童像

課題を自ら設定し、それを解決するために、目的や意図に応じて適切に情報を収集したり、友達と協働したりしながら問題解決に何度も挑戦していく子

本校では、校内研究の実践を通して、上のような児童を育成することを目指している。特に第4学年では、「課題設定の場面」を大切にし、一人一人が「自分事」の課題をもち、各教科等の学習に臨めるよう、単元計画を作成している。それが主体的な探究活動や協働的な学びにつながると考える。

6 研究主題に迫るための工夫

(1) 課題設定の工夫

児童が地域の水道事業について「自分事」として捉え、主体的に学習活動に取り組もうとするために、単元の導入では日本人が一日に使用する水の量を提示する。その水量を具体的にイメージさせるために、2Lペットボトル何本分になるかを知らせる。そして、水を入れたペットボトルを実際に持つ活動を行うことで水の重さを体験させる。これにより、日常的に使っている水の量や重さについて実感を伴って捉えられるようにする。

また、水道が整備されていない国の映像（「アイシャの1日」）を視聴させ、清潔な水が自由に使える日本の状況が当たり前ではなく非常に恵まれたことなのではないかと考えさせる。

これらの体験や資料提示を通して、水の供給や利用について関心をもたせるとともに、友達と考えを共有することで『「きれいな水」を「いつでも」「たくさん」「かんたんに」使えるのはどうしてだろう』といった問いを自ら立てられるようにする。

(2) 郷土愛を高める単元づくり

三宅村の水道に対しては「飲料用としては使えない」といったマイナスイメージをもっている児童が多い。しかし、三宅村役場水道担当の方々は難しい地理的・人口的条件の中「日常生活に使う水の安全を守るために仕事をしてくれている」ということは内地と変わりがないことを押さえるようにする。そして、郷土への理解・思いを高められるように学習を進めていく。

(3) 地域のヒト・モノを生かした学習展開

社会科見学では、三宅村役場水道担当の方に協力していただき、「坊田配水池」と「茅場浄水場」の見学をする。また、三宅村役場水道担当の方には、学習を進めている中で浮かんだ疑問などをインタビューさせてもらえるよう協力を依頼する。更に、学校の中にある水道に関わる施設を実際に見ることで体験的な学びの実現を目指す。

(4) カリキュラム・マネジメントの視点

本単元の最後は、新聞を作成する計画にしている。国語科「新聞をつくろう」の単元と関連させて学習を進めることで、国語科の学習でも目的意識・課題意識を強くもって学習に臨めるようになると考える。

(5) バーチャル社会科見学の活用

「東京都こどもホームページ」のバーチャル社会科見学を活用する。三宅村には存在しない「ダム」を学習する際に利用する。実際にその大きさや役割を目の前で見ることができないが、擬似的な体験を通して、気付いたことや分かったことを話し合わせて理解を広げていきたい。

(6) 日常的な取組

① プレゼンテーション能力・情報整理力の向上をねらいとした朝のスピーチ

朝の会の時間を活用し、日直がテーマに沿ってスピーチを行う活動を実施している。必ずプレゼンテーション資料を作成させ、聞き手にとって「聞きやすく、分かりやすい」資料の作成に取り組ませている。相手意識をもってプレゼンすることや情報の獲得、取捨選択などの活動を日常化させている。

② 学び方の習慣化を目指す自主学習

毎日の宿題として「自主学習」に取り組ませている。学習の流れは、①めあてを立てる②練習する③分析する④振り返るの4つのステップで構成している。特に③の「分析」に重点を置き、「できたこと」「できなかったこと」を振り返り、その原因や改善策を自ら考え、次の学習につなげるように指導している。このような学びを積み重ねることで、主体的に学習に取り組むことの習慣化を図っている。

(7) 単元を学習するために必要な情報活用能力 (情報活用能力 # 東京モデル ver.1.0 より抜粋)

基礎スキル	情報活用スキル
<ul style="list-style-type: none"> ・タイピング入力 (20文字/1分間) ・オクリンクプラス操作 ・複数キーワードを用いた情報検索能力 ・ファイル共有のための管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的を意識して情報活用の計画を立案。 ・情報を収集し、表やグラフを用いた情報整理 (オクリンクプラス・Google アプリ・Canva) ・2～3個の情報の傾向や変化を捉える力 ・相手や目的に応じて安全に情報の発信・交信 ・情報活用を振り返り、改善点を見出す力 ・事実や根拠に基づいた分析・判断 ・2～3個の情報を比較したり関連付けたりして新たな意味を見出す力
プログラミング	情報モラル・情報セキュリティ
<ul style="list-style-type: none"> ・手順を図解し、説明できる。 ・問題解決に向け、見通しをもって手順の組み合わせを考え、実行できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の情報の大切さの理解 ・情報が正しいかどうかの判断 ・情報の権利を守るための適切な行動 ・情報や情報技術をよりよい生活や社会づくりに生かそうとする思考

7 単元計画 (11時間)

過程	時	ねらい	○学習活動	・指導上の留意点 ◆資料 ◎評価
つかむ	1	水不足の国や地域の実態と、自分たちの水の使用の実態を比べ、実情の違いについて関心をもつ。	○1日に使う水の量について予想を立てる。 ○水の重さ体験をする。 ○水不足の国の映像を視聴し、学習問題をつくる。	◆2Lのペットボトル ◆2Lのペットボトル6本入りの箱 ◆東京都水道局 HP ◆ペットボトル110本分の写真 ◆日本ユニセフ協会「13歳のアイシャの1日～水を得るために～」 ・体験的に学べるように実際のペットボトルを持って量感を高める。 ◎家庭の水の使われ方から、自分たちの暮らしには大量の水が使われていることを理解している。【発言・ノート】
		<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p><学習問題></p> <p>いつでも、きれいで、安心な水が簡単に手に入るのはどうしてだろう。</p> </div>		
調べる	2	学習課題に対する予想を立て、学習計画を立てる。	○学習問題に対する予想を立てる。 ○副読本の資料から、水源林から浄水場までの水の流れを確認する。 ○学習計画を立てる。	◆副読本「わたしたちの東京都」 pp.18,19 ・予想を出す際には、多様な意見が出せるよう、自由に発想させる。 ◎水の経路の資料から予想や学習計画を立て、学習問題を追究しようとしている。【発言・ノート】
	3	浄水場の働きを調べる。	○浄水場の役割について予想する。 ○川の水を飲み水に変える仕組みを調べる。	◆デジタル教科書「わたしたちの水道」 ◆副読本「わたしたちの東京都」 ・わたしたちの水道のデジタル版を使い、動画を見たり、資料を読み取ったりしてまとめられるようにする。 ・オクリンクプラスに各施設の働きをまとめさせる。 ◎浄水場ではたくさんの過程を経て川の水を安心して飲める水にしていることを理解している。【発言・オクリンクプラス】
	4	ダムや水源林の働きを調べる。	○バーチャル社会科見学を使い、ダムや水源林の働きを調べる。	◆デジタル教科書「わたしたちの水道」 ◆副読本「わたしたちの東京都」 ◆東京都こどもホームページ「バーチャル社会科見学 小内河ダム」 ・ワークシートを使い、施設の役割をまとめさせる。

				◎調べたことを基に東京都と近県の協力関係に着目して、ダムや導水路の確保について考えている。【発言・ワークシート】
まとめる	5	東京都の水の流れや特徴をまとめる。	○学習してきた施設を並び替え、東京都における蛇口に届くまでの流れをまとめる。 ○東京都の水道事業の特徴を捉える。	◆各施設の写真 ・それぞれの施設の写真をフローチャートのようによまとめ、水の流れが視覚的に分かりやすいようにする。 ◎水道施設の仕組みや人々の協力関係と地域の人々の健康や生活環境を関連付け、水道事業が果たす役割を考え、表現している。【発言・オクリンクプラス】
調べる	6	三宅村の水道はどのような流れで届いているのか予想を立てる。	○三宅小学校水道を蛇口から遡る。 ○学校から先の水の流れについて予想を立てる。 ○社会科見学で見学してくることや質問したいことを出し合う。	・校内にある設備を確認し、その先はどうなっているのかを今までの学習を基に考えるよう促す。 ◎三宅村の水の流れについて、学習してきたことを基に、興味関心を高めている。【発言・オクリンクプラス】
	7・8	坊田配水池、茅場浄水場の見学をし、三宅村の水道の仕組みを調べる。	○坊田配水池の見学をする。 ○茅場浄水場の見学をする。 ○三宅村役場水道担当の方にインタビューをする。 ○見付ける工夫や特徴を出し合う。	・事前に質問したいことを募り、水道担当の方に質問できるようにする。 ・どのような思いをもって仕事に取り組んでいるのかを話してもらう。 ◎インタビューや話を聞くことを通して、浄水場や配水池の働きや、水道担当の人々の仕事について理解している。【発言・見学カード】
まとめる	9 本時	三宅村の浄水事業について、社会科見学で学んだことを整理し、特徴を捉える。	○前時までの振り返りをする。 ○三宅村の水道の流れを整理する。 ○三宅村の水道の特徴を捉える。	◆デジタル教科書「わたしたちの水道」 ◆副読本「わたしたちの東京都」 ◎三宅村の水道事業が果たす役割や働く人々の工夫や願いを理解している。【発言・オクリンクプラス・ノート】
	10	東京都と三宅村の水道事業の特徴を比較し、学習問題の答えを出す。	○三宅村と東京都の水道事業について比較する。 ○共通部分に着目し、学習問題の答えを出す。	◆東京都の水の流れ・特徴をまとめたもの ◆三宅村の水の流れ・特徴をまとめたもの ◎東京都や三宅村の水道事業が果たす役割や働く人々の工夫や願いを理解している。 【発言・オクリンクプラス・ノート】
いかす	11	学習して分かったことや、考えたこと、自分たちにできることを新聞にまとめる。	○学習してきたことを基に、新聞を作成する。	◆デジタル教科書「わたしたちの水道」 ◆副読本「わたしたちの東京都」 ◆東京都水道局 HP ・新聞の作成については、国語科の時間と合わせて行う。 ・節水について、自分なりの考えを必ず新聞に書くよう指示する。 ◎学習したことを基に、節水のために自分たちが協力できることを考え、選択・判断し、表現している。【発言・新聞】 ◎節水のために自分たちができることを考えようとしている。【発言・新聞】

8 本時の指導（9／11時間）

（1）本時の目標

三宅村の浄水事業について、社会科見学で学んできたことを整理し、特徴を捉えることができる。

（2）本時の展開

	学習活動 T:教員の主な発問 C:児童の反応	◆資料 ○留意点 ◎評価【方法】
導入 (5分)	1 社会科見学の様子を振り返り、本時のめあてを確かめる。 T 蛇口からの順番を正しく並べ変えよう。	◆社会科見学の写真・メモ ○社会科見学の様子を写真を使って振り返り、想起させる。 ○三宅村の水道の流れを全体で振り返り、浄水場を通るパターンと、そうでないパターンの流れがあることを確認する。
	三宅村の水道のくふうを整理し、とくちょうをとらえよう。	
展開 (33分)	2 個人で三宅島の水道事業の工夫や特徴を分類する。 Tそれぞれの視点で分類しましょう。 <安心・きれい> C 川の水ではなく地下水を利用している。 C 浄水処理をしている。 C 点検をしている。 C 消毒をしている。 <いつでも・かんたんに> C 受水槽に水をためている。 C 配水池に水をためている。 C 漏水が起きたときに職員の人が対応してくれる。 C 配水管がたくさんある。 <その他> C 職員の人は少ない人数で仕事をしている。 C 川やダムはない。 3 全体で三宅島の水道事業の工夫や特徴を捉える。 T全体で分類してみましょう。 C ぼくたちの班は、浄水場の役割を「安心・きれい」にしたけれど、いつも動いているという視点で見ると「いつでも・かんたんに」にもなるはずだよ。 C 配水池は「いつでも・かんたんに」に分類したよ。 C 受水槽も「いつでも・かんたんに」で良さそうだね。	◆浄水施設や配水池などの写真 ○社会科見学終了後に出した工夫と特徴を生成AIでキーワード化したカードを子供たちのマイボードに送信しておく。 ○マイボードの背景にY字チャートの枠を用意させる。 ○「安心・きれい」「いつでも・かんたんに」の視点に当てはまらないものは「その他」の項目にまとめさせる。 ○時間内に分類しきれなかったものは、Y字チャート外に置かせておく。 ○マイボードで分類したカードを観点別のみんなのボードに送信させる。 ○観点別に送信したカードを「ワード集計機能」を使い板書にまとめ、ノートに書かせる。 ○大きく示された文字は簡単に触れ、小さく表示されている言葉については子供たちに問い返し検討する。 ○その観点に分類させた理由を出させ、全体でまとめられるようファシリテートする。 ◎三宅村の水道事業が果たす役割や働く人々の工夫や願いを理解している。【発言・オクリンクプラス・ノート】
まとめ (7分)	4 本時のまとめをする。	○地理的・人口的条件で水を確保することが難しい中でも、三宅村役場水道担当の方々を中心に、水道の管理をしてくれていることを押さえる。
	三宅村では、地下水を水源に浄水処理や消毒をして「安心・きれいな」水を「いつでも・かんたんに」使えるようにしている。	
	5 本時の振り返りを記入する。	○次時につながるよう、今後の活動の見通しをもたせてから書かせる。

9 授業観察の視点

- （1）三宅島の水道事業の特徴を捉えるための活動に主体的に取り組んでいたか。また、単元設定と教員の関わりはどうだったか。
- （2）本単元の学習計画を進めていく上で、土台となる基礎的なスキルは適切だったか。不足がある場合は、どのようなものがあり、今後はどのようなスキルが必要だと考えられるか。
- （3）本時のオクリンクプラスを使った情報整理の活用は適切であったか。また、よりよい情報活用の方法や手立てにはどのようなものが考えられるか。

10 指導講評

○情報活用能力の体系的な位置付け

単元計画の中で、基礎スキル、情報活用、プログラミング、情報モラルの4つの観点から必要な能力を整理している点は非常に先進的で、評価に値する。

基本的な操作スキルはICTの使用頻度に比例して伸びるが、探究スキルや情報モラルは、意図的な指導や育成の視点をもってこそ育つものである。

○分類整理を通した「対話」の価値

本時の最大の成果は、分類の「正解」を出すことではなく、分類整理の過程で「そういう見方もあるのか」と友達の視点を取り入れ、自分の考えを再構築するディスカッションが活発化したことにある。

より質の高い情報整理を目指すなら、教員が与えた枠組みで分けるだけでなく、児童自らがラベル（切り口）を再定義するような段階を目指すとうい。

○ICTとアナログの適切な使い分け

水道の蛇口からの流れをアナログの掲示物で示したり、活動の指示を黒板に残したりするなど、ICTとアナログを効果的に使い分けており、児童が迷わず活動できていた。

○テキストマイニング（ワード集計）活用の留意点

テキストマイニングでは、大量の情報から瞬時に傾向を掴むには有効だが、個々の質的な意見や良さが削ぎ落とされる可能性がある。

活用する際は、パッと傾向を見せるだけで終わらせず、その後に「なぜその言葉が多く出たのか」と個別の意見を吟味するステップを設けることが重要である。

○AI時代に求められる「問い」を立てる力

情報収集などはAIで代替可能な時代になる。これからの教育では、調べればすぐに分かることなく、AIでは代替しにくい「Why（なぜ）」「How（どうやって）」「If（もし～なら）」といった、質の高い問いを児童自らが立てる力を育てることが不可欠である。

○情報活用能力の自覚化

児童自身が「今日ほどのレベルのスキルを目指すのか」を意識できるような段階的な指導（レベル別の明示など）を取り入れることで、更なる能力向上が期待できる。

情報の分類整理は、バラバラのピースをぎ合わせて一つの絵を完成させるパズルのようなものです。単に場所を埋めるだけでなく、「なぜそこに置くのか」を語り合うことこそが、深い理解という完成図へとつながる架け橋になる。

11 成果と課題

成果

- ・単元計画の段階で、必要な情報活用能力（基礎スキル、情報活用など）が整理されており、指導の指針が明確であった。
- ・分類整理のプロセスを通じてディスカッションが活発化し、考えを深めることができた。
- ・教員が意図的に「なんで？」と問い返すことで、児童に分類の根拠を比べさせ、社会的な視点で考える力を深められた。
- ・児童のタブレット端末を使用する上で基礎となるICTスキル（ショートカットの使用や操作方法の自己選択など）が定着していることが確認された。

課題

- ・活動の目的が教員側から提示された課題に留まり、子供たちの「やりたいこと」とつながっていたのか、主体的な取り組みを引き出す点に課題が残った。
- ・キーワード「安心」の捉え方について、「安全」の方が適切であったなど、子供たちが概念を正確に捉えるための言葉の選定が必要であった。
- ・思考の過程でChromebookを多用した結果、紙のノートに記録が残らず、根拠を見ながらの振り返りが難しいという、ICTとノートの併用の課題が残った。

- ・オクリンクプラスのワード集計機能（テキストマイニング）の活用について、大量の情報から傾向を掴むのには向いているものの、質的な意見の吟味には課題が残った。

第6学年 理科 学習指導案

令和7年9月24日（水）
三宅村立三宅小学校
第6学年1組 13名
第6学年しいのき学級 1名
授業者 清水 康志

1 単元名 大地のつくり

2 単元の目標

土地やその中に含まれる物に着目して、土地のつくりやでき方を多面的に調べる活動を通して、土地のつくりや変化についての理解を図り、観察、実験、調査などに関する技能を身に付けるとともに、主により妥当な考えをつくり出す力や主体的に問題解決しようとする態度を育成する。

3 単元の評価規準

観点 評価	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の 評価規準	<p>①地層を観察し、得られた結果を適切に記録している。</p> <p>②火山の噴火によって溶岩が流れ出し、大地を形成していることを理解している。</p> <p>③機器を正しく扱いながら火山灰に含まれる鉱物を観察し、得られた結果を適切に記録している。</p> <p>④海の生物が多いことや、化石は何億年も前に生物が生きていた証拠であることを理解している。</p>	<p>①観察結果を基に、地層がしま模様に見える理由について考察し、より妥当な考えをつくり出し、表現するなどして問題解決をしている。</p> <p>②土地のつくりについての問題を見出し、予想や仮説を基に解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。</p>	<p>①土地をつくっている物に興味や関心をもち、資料や私たちが住んでいる三宅島から問題を見出している。</p> <p>②礫、砂、泥の地層のでき方に興味をもち、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしている。</p>

4 指導観

(1) 単元観

本単元は、第4学年「B（3）雨水の行方と地面の様子」、第5学年「B（3）流れる水の働きと土地の変化」の学習を踏まえて、「地球」についての基本的な概念等を柱とした内容のうちの「地球の内部と地表面の変動」に関わるものであり、中学校第2分野「(2) 大地の成り立ちと変化」の学習につながるものである。ここでは、児童が、土地やその中に含まれている物に着目して、土地のつくりやでき方を多面的に調べる活動を通して、土地のつくりや変化についての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主により妥当な考えをつくり出す力や主体的に問題解決しようとする態度を育成することがねらいである。

大地を変化させる要因として、火山活動や地震に着目し、自然災害と関連付けて調べるとともに、災害への備えの意識を高めながら、自然からの恩恵にも気付かせ、私たちの生活と密接に関係する環境要因の一つであることを見出させたい。

(2) 児童観

本学年の児童は、理科に興味をもって学習に取り組む様子が見られる。今年度4月に行った三宅村学力調査の結果では、「A 物質・エネルギー」「B 生命・地球」両分野共に、平均正答率が目標値を上回っていた。一方で、全国学力調査の結果では、観察や実験の結果から問題を見出したり、考察やまとめを記述したりすることを苦手とする児童が多いことも分かった。

そこで、自分たちが住んでいる三宅島の成り立ちから火山活動について考え、地層は火山活動の積み重ねによってできていることから学習を進めていくことにより、大地のつくりについて、身近な事象である事柄から問題を見出し、考察やまとめを記述する力を身に付けられるのではないかと考えている。また、本単元の学習を通して「火山灰以外でできる地層はあるのだろうか」というような新たな問題を見出すことができるようにしていく。そして、観察や実験を通して得られた結果から振り返ったり、考察したりすることで、理科的な見方や考え方を育てていく。

5 目指す児童像

課題を自ら設定し、それを解決するために、目的や意図に応じて適切に情報を収集したり、友達と協働したりしながら探究的な学びに継続して挑戦する子

本校では、校内研究の実践を通して、上記のような児童を育成することを目指している。特に第6学年では、「自分なりの考えをもつこと」を大切にし、一人一人が自分事として課題を捉え、各単元の学習での問題解決を図ることができるようにしている。それにより、主体的な探究活動や、協働的な学びへとつながっていくと考えている。

6 研究主題に迫るための工夫

(1) 単元構成の工夫

本単元「大地のつくり」では、「水の流れによってできる地層」と「火山活動によってできる地層」の2つが取り上げられている。教科書における学習の順序は、5年生での水の流れ方の学習を踏まえて、水の流れによってできる地層から学習した後、火山活動によってできる地層を学習することになっている。地域の実態として、三宅島は定期的に火山活動を繰り返している活火山であり、火山活動によってできた地層が島の至るところで確認することができる環境にある。一方で、三宅島には川がなく、流れる水の働きによってできる地層が身近には無いことから、身近にある火山活動の痕跡から大地のつくりを学習していくことで、課題を自分事として捉えることができるのではないかと考え、単元構成をした。

(2) 地域のヒト・モノ・コトを生かした学習活動の工夫

学区内などの身近な地域において、観察に適した露頭がない場合、本単元では資料中心の学習で終わりがちである。三宅島には、身近に火山活動の痕跡があり、実際に見に行くことができる環境であることから、伊豆岬周辺にある地層を実際に見学するフィールドワークを実施する。実際に見学することで、実感をもって地層の広がりをつまえることができるとともに、時間的な見方、空間的な見方で地層をつまえ、三宅島における大地の形成過程について、多面的に考えることができると考えた。

(3) ICTを活用した協働的な学びの工夫

本単元の学習では、予想→検証→考察・まとめの一連の流れにおいて、オクリンクプラスを活用する。本学年の児童は、自分なりの言葉で論述することが苦手であり、特に考察を書くことを苦手としている。そこで、一人一人が書いた考察について、共同編集を通して出てきた言葉を相談したり、選んだりしながら考えをまとめていくことで、論述する力を高めていくことができるのではないかと考えている。また、オクリンクプラスをポートフォリオ的に活用していくことで、考察を記述する力が高まっていく様子や思考の変容を見ることができる。

更に、スライド機能を使うことにより、地層の時間的な変化や空間的な変化を視覚的に理解できるようにしていくこともできるため、オクリンクプラスを活用することが有効なのではないかと考えた。

7 単元の指導計画（9時間扱い）

次	時	主な学習活動（○）	教員の指導・支援（□）・評価（☆）	情報活用能力 # 三宅モデル
1 大地をつくっている物	1	<p>○学校の校庭の写真を示し、地面の下がどのようなになっているか考える。</p> <p>○地層の写真を見せて、気付いたことを書く。</p> <p>○学校の写真に戻り、地面の下がどのようなになっているかを予想する。</p>	<p>□校庭の下の大地的様子を、図や言葉で表現させる時間を設ける。</p> <p>□写真から地層の広がり注目させ、学校の地面の下にも同じような土地の様子が見られるのではないかと、ということを考えさせる。</p> <p>☆土地をつくっている物に興味や関心をもち、資料や自分たちが住んでいる三宅島から問題を見出している。</p> <p>（主体的に学習に取り組む態度）</p>	<p>【計画】</p> <p>何のために、どのようにやるのか、詳しく考えることができる。</p>
		<p>私たちが住んでいる三宅島の地面の下は、どのようなになっているのだろうか。</p>		
	2・3	<p>（伊豆岬）</p> <p>○露頭を見学し、気付いたことや分かったことをまとめる。</p>	<p>積み重なっていることに気付かせる。</p> <p>□しま模様を構成している物を観察したり、触ったりして、違いに気付かせる。</p> <p>□海や山に注目させ、大地のつくりに関係していることに気付かせる。また、雄山が火山であることを知らせる。</p> <p>☆地層を観察し、得られた結果を適切に記録している。</p> <p>（知識・技能）</p>	<p>いろいろな方法で、必要な情報を正しく集めることができる。</p>
		<p>しま模様に見えるのは、火山が関係しているのではないかと。</p>		
2 地層のでき方		<p>しま模様を解き明かそう。《溶岩について》</p>		
	4	<p>○映像資料で、火山が噴火する様子を確認する。</p> <p>○噴火のモデル実験を行い、溶岩が流れ出て大地を形成していく様子を観察する。</p> <p>○火成岩を知り、観察する。</p>	<p>□噴火によって溶岩が流出したり、火山灰や火山弾が噴出したりすることを気付かせる。</p> <p>□身の回りにある岩石は、長い年月をかけてできていることを知らせる。</p> <p>☆火山の噴火によって溶岩が流れ出し、大地を形成していることを理解している。</p> <p>（知識・技能）</p>	<p>【分析】</p> <p>情報を比べたり、つなげたりして、深く考えることができる。</p>
		<p>溶岩が冷えて固まることで、大地ができる。</p>		

5	しま模様を解き明かそう。《火山灰について》		
	<p>○噴火のモデル実験の映像を見て、火山灰が下から上に積もっていく様子を観察する。</p> <p>○火山灰の粒の形はどのようなものかを予想する。</p> <p>○火山灰の中の粒を観察する。</p>	<p>□火山灰は、下から上に積もっていくことを知らせる。</p> <p>□粒の色や形、大きさに注目して観察させる。</p> <p>☆火山の噴火によって火山灰が噴出し、地面に積もることで地層が作られることを理解している。（知識・技能）</p> <p>☆機器を正しく扱いながら火山灰に含まれる鉱物を観察し、得られた結果を適切に記録している。（知識・技能）</p>	<p>【分析】 情報を比べたり、つなげたりして、深く考えることができる。</p>
	<p>火山の噴火によって噴き出した火山灰は、風によって運ばれ、積もる。</p> <p>火山灰の中には、鉱物が含まれていて、角ばっている。</p>		
6 (本時)	火山活動による地層のでき方をまとめよう。		
	<p>○これまでの学習から、どのようにして地層が作られるのかを、図や言葉にして表す。</p>	<p>□3つの観察、実験から、地層は火山活動の積み重ねによってできることを、考察から導くことができるようにする。</p> <p>☆観察結果を基に、地層がしま模様に見える理由について考察し、妥当な考えをつくり出して表現することができる。（思考・判断・表現）</p>	<p>【分析】 情報を比べたり、つなげたりして、深く考えることができる。</p> <p>【発信】 伝えたいことを言葉や文字、絵を使って分かりやすく表すことができる。</p>
7	火山活動以外にも地層はできるのだろうか。		
	<p>○予想を立てる。</p> <p>○実験の計画を立てる。</p>	<p>□礫、砂、泥は丸みを帯びていることに気付かせ、水の働きとの関連を予想できるようにする。</p> <p>□流れる水の働きの学習と結び付けながら、実験に必要なものや、川や海に代わるもの、土や水が必要であることを挙げさせる。</p> <p>□既習の知識から、妥当ではないと思われる実験の方法は省けるよう、グループ内で話し合いながら計画させる。</p> <p>☆土地のつくりについての問題を見出し、予想や仮説を基に解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。（思考・判断・表現）</p>	<p>【計画】 何のために、どのようにやるのか、詳しく考えることができる。</p>

8	<p>○地層堆積モデル実験器等を用いて、モデル実験を行い、地層ができるかどうかを確かめる。</p>	<p>□2回行い、層になることや、その層の並びについて着目させる。</p> <p>□他のグループの実験にも自由に行き来できるようにし、自分のグループの実験だけでは分からない点や興味のある実験結果を交流できるようにする。</p> <p>□比較できるグループを近くに置くことで、交流しやすいように場の工夫をする。</p> <p>☆礫、砂、泥の地層のでき方に興味をもち、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしている。</p> <p>(主体的に学習に取り組む態度)</p>	<p>【収集】 いろいろな方法で、必要な情報を正しく集めることができる。</p> <p>【整理】 図や表を使って、情報を見やすく整理することができる。</p>
<div data-bbox="276 651 1457 714" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>流れる水のはたらきによって、運搬されながら海底に堆積し、地層ができる。</p> </div>			
9	<p>○どのような化石があるのか、標本を観察し、調べる。</p>	<div data-bbox="276 790 1457 862" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>化石には、どのようなものがあるのだろうか。</p> </div> <p>□図鑑などを活用し、どのような生物だったのかを知る。</p> <p>□海に生息していた生物の化石が多いことに気付かせるようにする。</p> <p>□生物が生きていた時代が分かる年表を用意し、地層が大昔にできていることを理解させる。</p> <p>□流水によって地層ができていることを考える手掛かりとなるよう、海が関連していることをおさえる。</p> <p>☆海の生物が多いことや、化石は何億年も前に生物が生きていた証拠であることを理解している。</p> <p>(知識・技能)</p>	<p>【分析】 情報を比べたり、つなげたりして、深く考えることができる。</p>
<div data-bbox="276 1469 1445 1599" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>水で運ばれてきた土砂などが生き物の体の上に堆積し、長い年月をかけて化石がつくられる。</p> </div>			

8 本時の指導（6/9時間）

（1）本時の目標

- ・これまで観察してきた結果を基に、地層がしま模様に見える理由を考察し、より妥当な考えをつくり出して、表現することができる。

（2）本時の展開

	学習活動	教員の指導・支援（○） 評価（☆）
導入 (3分)	<p>1 これまでの学習を振り返る</p> <p>T：火山がつくる地層は、どのような仕組みでできているのかな。</p> <p>C：火山が噴火をすることでできる。</p>	<p>○第5時まで学習してきたことを、オクリンクプラスで確認する。各授業の内容やキーワードを提示する。</p>
	<div>火山活動による地層のでき方をまとめよう。</div>	
展開 (37分)	<p>2 学習内容を整理する</p> <p>T：火山の噴火は一度だけかな。何度も起こるとどうなるかな。</p> <p>C：1回だけではない。</p> <p>C：何度も繰り返し起こって、溶岩が流れたり、火山灰が積もったりする。</p> <p>3 考察を書く</p> <p>①個人活動</p> <p>②グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①の個人活動で書いた考察を班でお互いに読み合い、班で分かりやすい表現にする。 <p>4 全体で共有する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに発表する。 	<p>○これまでの実験や観察で得られた結果や写真、キーワードを示しておく。</p> <div> <p>【オクリンクプラスの活用】</p> <p>オクリンクプラスは、これまでの学習を簡単に振り返ることができる。児童自身が学習してきたことを基に、考えを自分の力で記述できることを目指していく。</p> </div> <p>○地層がどのようにしてできるのかについて、これまで学習してきた3つの実験や観察の結果を基にして考え、考察を書くように助言する。</p> <p>○考察の型を示しておく。</p> <p>○考察を書く際のポイントを示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火山が噴火すると何が出るか ・それが、どう積もるのか ・それが地層になると、どんな意味をもつのか <p>○絵を描いたり、図で示したりしながら書いても良いことを伝える。</p> <p>○板書にキーワードを整理し、良い表現を取り上げておく。</p>
まとめ (5分)	<p>5 学習をまとめる</p> <p>T：火山の地層を調べると、どんなことが分かるのかな。</p> <p>C：火山活動が起きた回数が分かる。</p> <p>C：下の方が古くて、上の方が新しい時代だ。</p>	<p>☆観察結果を基に、地層がしま模様に見える理由について考察し、より妥当な考えをつくり出して、表現することができる。</p> <p>【オクリンクプラス・発言・グループワーク】</p>
	<div>火山活動の積み重ねによって、地層ができる。</div>	
	<p>6 本時の振り返りを書く</p>	

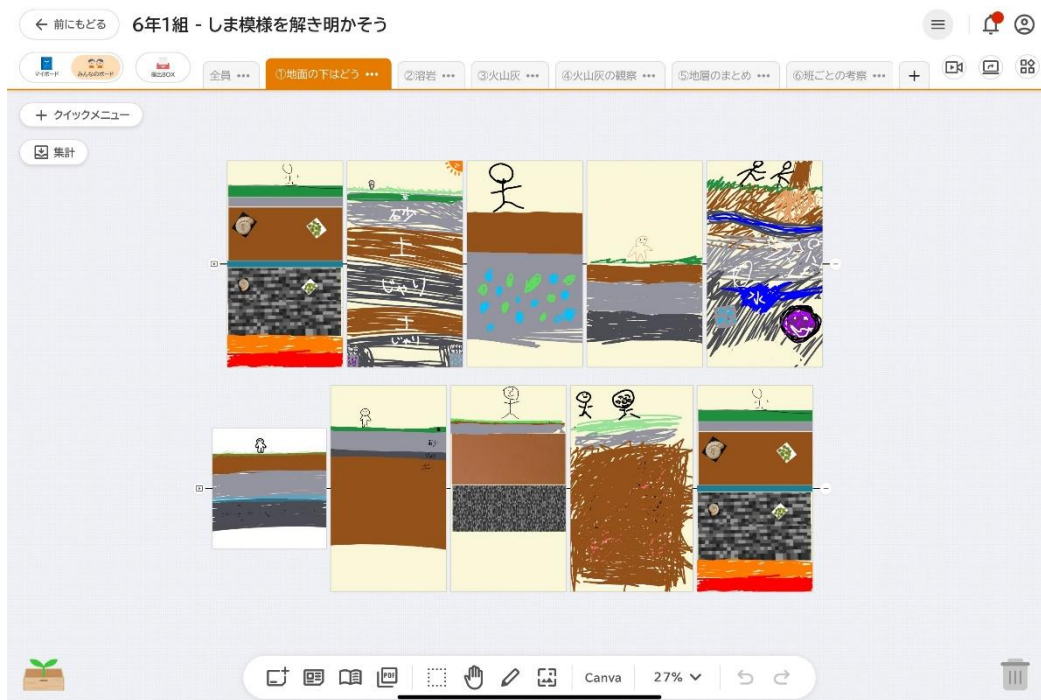
9 授業観察の視点

- (1) 児童が大地のつくりを理解する上で、三宅島の実態に応じて教科書の指導順序を変えた単元構成は有効であったか。また本時の協働的な学びをするための教員の関わりや ICT 活用は適切だったか。
- (2) 本単元の学習計画を進めていく上で、土台となる基礎的なスキルは適切だったか。不足がある場合は、どのようなものがあり、今後はどのようなスキルが必要だと考えられるか。
- (3) 本時の ICT 活用について、「三宅モデル」の分析や発信スキルを身に付けるためにオクリンクプラスを活用することは適切であったか。また、蓄積データを活用した分析や発信をすることに効果的であったか。また、よりよい情報活用の方法や手立てというものにはどのようなものが考えられるか。

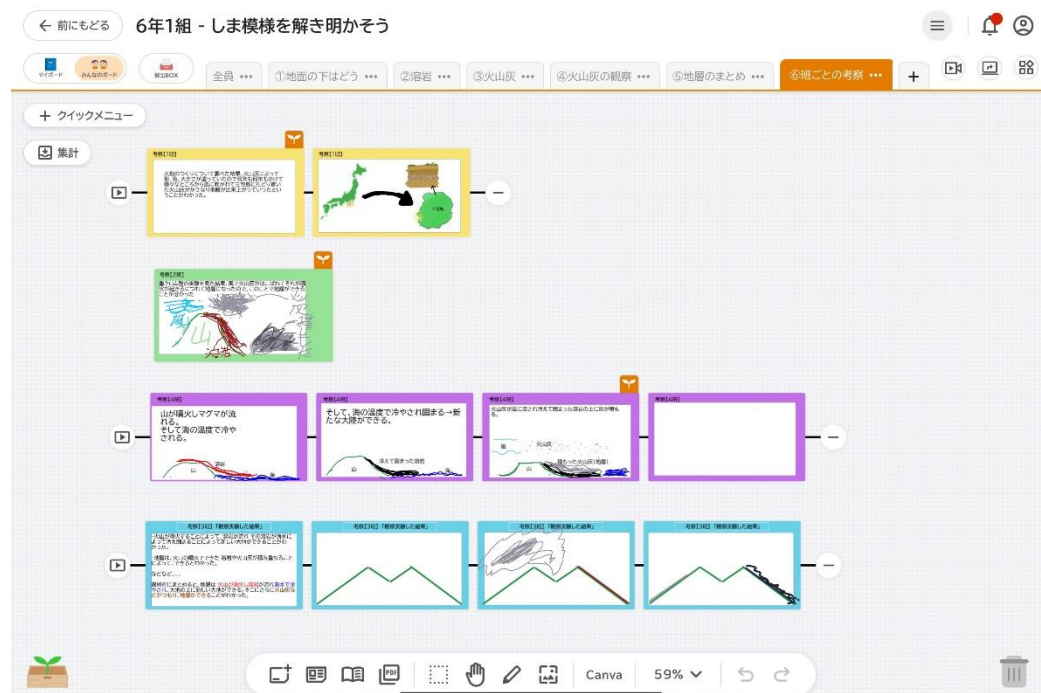
10 資料

【理科ノート】

①地面の下はどのようなになっているのだろうか



②グループごとの考察



1 1 指導講評

○指導観の劇的な転換

情報活用能力を育成し授業を変えるためには、教員自身の指導観を転換することが不可欠である。教員が頑張る授業ではなく、児童がデジタル機器を使いこなし、自分たちで学びを進める姿を目指すなければならない。

○主体的な学びへの「委任」

学習課題や学習方法の選択を児童に委ねることが大切である。児童が自ら学びを操縦することで責任感と主体性が生まれ、個別最適な学びへとつながる。

○伴走者としての教員の役割

教員の役割は、知識の伝達者ではなく、学びを誰一人取り残さないための支援者（ファシリテーター）である。児童の文脈に寄り添い、適切なタイミングで支援を行うスタイルを目指すべきである。

○「考察」と「まとめ」の厳密な区別

理科的思考を育てるためには、事実に基づき予想を検証する「考察」と、そこから得られた結論である「まとめ」を明確に分けて指導し、論理的な記述力を高める必要がある。

○環境整備の推進

教室のレイアウトや教材、デジタル環境など、児童が自分の目的や意図に応じて自由に活用できる「環境のユニバーサルデザイン」を整備し、自律的な学びを支える場を作ることが重要である。

○失敗を恐れないチャレンジ

新しい学習形態への移行には試行錯誤がつきものである。まずは自分の得意な教科や単元で、一単元通して児童に学びを委ねる形に挑戦してほしい。その経験が教員自身の変容を促す。

○教育動向への注視とアップデート

次期学習指導要領に向けた中央教育審議会の論点整理など、国の動向を常に把握しておくこと。三宅小で作成した「三宅モデル」などの指針を、児童の実態に合わせて継続的にアップデートしていくことが求められる。

大地のつくりを学ぶことは、積み重なった時間の層を解き明かす旅のようなものである。教員が答えというゴールへ誘導するのではなく、子供たちが自ら地層の中に問いを見付け、納得解を積み上げていくプロセスそのものが、彼らの未来を創る土台となる。

1 2 成果と課題

成果

- ・三宅小学校において、情報活用能力の育成研究が1年半にわたり推進されており、その活動状況が確認された。
- ・高学年向けに「情報活用能力#三宅モデル」が作成されており、これは児童と教員にとって大きな指針となる良い取り組みであると評価された。
- ・東京都教育委員会が作成したICT活用に関する資料（デジタルを支援した学びのガイドなど）が具体的に紹介され、今後の学校運営や指導観転換のための新しい財産となる情報が得られた。

課題

- ・学習者用端末を「文具のように」日常的に活用するという目標に対し、まだ教員が統制している場面が多いという現状があり、更なる改善が必要である。
- ・個別最適な学びを進めるためには、年度初めから学習のプロセスを丁寧に指導し、児童が学習課題や学習方法を自己決定できるようにする指導を重ねていく必要がある。
- ・作成した「情報活用能力#三宅モデル」について、今後の子供たちの実態の変化に合わせて、継続的にアップデートしていく必要がある。
- ・児童が主体的に学習を進める方法や、理科における考察とまとめの定義を明確にした具体的な指導方法について、更に突き詰めていく必要がある。

第2学年 生活科 学習指導案

令和7年10月20日(月)
三宅村立三宅小学校
第2学年1組 14名
授業者 三角 寛騎

1 単元名 えがおのひみつたんけんたい

2 単元の目標

- ・地域の多様な場所や人々に関わる活動、身近な人々と伝え合う活動を通して、地域の人々と自分たちの生活との関わりや公共物のよさ、働きを捉えることができる。
- ・相手のことを想像して伝えたいことや伝え方を選んだりすることができる。
- ・身近な人々と関わるよさや楽しさが分かり、地域に親しみや愛着をもち、すすんで交流することや、適切に接することができる。

3 単元の評価規準

観点 評価	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の 評価規準	地域の多様な場所や人々に関わる活動、身近な人々と伝え合う活動を通して、身近な人々と関わるよさや楽しさ、適切な接し方が分かっている。	地域の多様な場所や人々に関わる活動、身近な人々と伝え合う活動を通して、地域の人々と自分たちの生活との関わり、公共物のよさや働きを捉え、相手に応じて伝え方を選んでいく。	地域の多様な場所や人々と伝え合う活動を通して、地域に親しみや愛着をもち、すすんで交流したり、適切に接したりしようとしている。

4 指導観

(1) 単元観

本単元では、自分たちが住んでいるまちを探検し、新たな発見やまちのよいところを見つけて、見付けたことを班で話し合い、まとめていく。その場所に関わる人との交流を通して、地域には様々な場所があり、そこには様々な人がいることに気付いたり、地域の場所や人に親しみをもったりすることをねらいとしている。

また、自分たちの力でまちのよいところを実際に見つけてまとめていく活動を通して、自分たちが住むまちを大切にしたい、周りの人に伝えたいという気持ちを育むことができると考える。

(2) 児童観

本学年の児童は明るく活発で、自分の意見を伝えることができる児童が多い。一方で、自分の伝えたいことをより詳しく伝えるためにどのような言葉を使うか判断する力は未熟な部分がある。したがって、本単元の学習では、友達と意見を出し合いながらどのような言葉を使ったらよいかを考える力も高めていく。

6月に坪田方面へのまち探検を行った。児童は、事前に「知りたいこと」をまとめ、実際に地域の方へインタビューをしたり、写真を撮ったりして資料づくりや発表活動を経験した。しかし、発表を見通して活動する意識が十分でなかったため、事前に考えた課題を意識せず、その場の興味に流されて情報を集める姿が見られた。その結果、発表資料づくりの段取りがうまくいかず、作成に苦戦するグループが多くあった。

そこで、本単元では「1年生に向けて発表する」という児童にも理解しやすい明確なゴールを設定する。これにより、児童は発表を見通して逆算的に考えることができ、まち探検で必要な情報や自分が発信したい内容を的確に準備できると考えられる。

5 目指す児童像

課題を自ら設定し、それを解決するために、目的や意図に応じて適切に情報を収集したり、友達と協働したりしながら探究的な学びに継続して挑戦する子。

本校では、校内研究の実践を通して、上記のような児童を育成することを目指している。特に第2学年では、「発表するために必要な情報は何かを整理し、決めたことを実行する力」を大切に、一人一人が課題を自分事として捉え、各単元の学習での問題解決を図ることができるようにしている。それにより、主体的な探究活動や、協働的な学びへとつながっていくと考えている。

6 研究主題に迫るための工夫

(1) 児童の経験から引き出した「知りたいこと」

児童が日常生活の中で利用している島内の施設に目を向けることで、これまでの経験をもとにした「知りたい」ことを引き出す。引き出した「知りたいこと」を知るためにどのような質問や見学をすればよいか考えさせる活動を行う。実際に自分が使ったことのある場所だからこそ、児童の関心や疑問は具体的で切実なものとなり、自ら課題を設定しようとする意欲につながるようにする。

(2) 地域のヒト・コト・モノを生かした学習活動

普段の生活の中で利用している施設や、家族や知り合いが勤務している施設が多く、児童にとって身近で関わりのある場所を訪れる活動を取り入れる。自分や家族が実際に利用している、あるいはつながりのある場所だからこそ、児童は深い関心をもち、地域の人に話を聞いたり建物や施設を詳しく見学したりしながら、課題解決に必要な情報を主体的に収集できるようにする。

(3) ICTを活用した協働的な学びの工夫

①情報整理での活用

オクリンクプラスのカード機能（意見が書かれたカードを移動したり、結合したりすることができる）を活用し、以下の活動を行う。これにより、視覚的に情報が整理され、思考の明解化を図る。

- ・児童から、探検場所別にボードを準備し、「聞きたいこと・見たいこと」を募集する。
- ・募集した「聞きたいこと・見たいこと」から、担当グループが、発表のために調べるべきことを選ぶ。

②調べたことの共有での活用

タブレット端末で撮影した写真やメモを持ち帰り、グループで共有できるようにする。見てきた場所や聞いてきた話を ICT で可視化することで、自分が聞いていない情報を共有できるようにし、互いの視点や考えを交流させながら課題解決に取り組むことができるようにする。

(4) 前回のまち探検を生かした、児童の気付きの深まり

児童は前回訪れた場所や体験をよく覚えており、ふだんの学習でも、前回のまち探検で気付いたことや感じたことを発言することが多い。また、計画・見学・まとめ・発表の流れを一度経験していることから、本単元のゴールを明確に想像でき、見通しをもって学習を進められると考えている。

(5) 体験して分かったことを、他者に伝える発表会の設定

学習したことをまとめて、振り返り、1年生に向けて発表会を行う。実際に利用したり関わったりしている場所や人について、自分の言葉で伝えることで学びを整理・深化させる。また、発表を聞いた人からの感想を受け取ることで、新たな気付きが生まれ、学びを更に広げていけるようにする。なお、発表の資料づくりの段階で、1年生が理解できる分かりやすい言葉を使って発表することを指導する。

7 単元の指導計画（2 1 時間扱い）

次	時	主な学習活動（○）	教員の指導・支援（□） ・評価（☆）	情報活用能力 # 三宅モデル
1	1 2	○前回のまち探検を振り返る。 ○まち探検をしたいところを決める。	□行ったところだけでなく、その時思ったことも確認する。 □行ってみたい理由を発表させる。 □自分の経験を生かして、もっと知りたいことを中心に、決めさせる。 ☆地域に親しみや愛着をもち、すすんで交流している。(主)	【計画】 知りたい・行ってみたいところを言える。
2	3 6 (本時)	○行きたい場所を基にグループを作り、聞きたいこと・見たいことを整理し、計画を立てる。 ○インタビューの練習をする。	□全体で活動について話し合い、見通しや予想を立てさせる。 □各探検場所の、良さを伝える発表をするために必要な「聞きたいこと」を出し合わせる。 □出し合った「聞きたいこと」を担当グループごとに精選させ、答えを予想させる。 □各探検場所の、「見たいこと」を決めさせる。 □計画カードを利用して役割を分担させ、インタビューのリハーサルをさせる。 ☆各探検場所のよさや働きを捉えるために、インタビューの内容を考え、選んでいる。(思) ☆地域の場所や人々に関わることに興味や期待をもって、計画を立てようとしている。(主)	【収集・整理・分析】 ・どの質問をすれば、自分の伝えたいことが伝わるかが分かる。 ・たくさんの情報を ICT 端末を利用し、整理できる。 ・考えの似ているところ、違うところが分かる。
3	7 12	○まち探検を行う。 「三宅村立図書館・ふるさとの湯・ホテル海楽・いきいきお魚センター」 ○仕事の仕方や手順、種類などについて知りたいことを調べる。	□あらかじめ準備した計画に沿って、調べていくように助言する。 □立てた予想と比較をしながら聞くように指導する。 □Chromebook の活用について確認させる。 ☆自分たちの聞きたいことを聞く際、適切な接し方をしている。(知) ☆仕事をしている人々の思いや工夫を予想しながら伝え方を選んでいる。(思)	【収集】 どのような方法で、調べればよいか分かる。

4	1 3 └ 1 7	<p>○まち探検で調べて分かったことを整理して、情報交換をする。</p> <p>○発表準備・練習をする。</p>	<p>□探検メモや、写真をもとにして考えたことを伝え合うことができるようにする。</p> <p>□グループで役割分担しながら、まとめができるようにする。</p> <p>☆体験したことを知らせたいという意欲をもって、話し合いや表現活動に取り組んでいる。(主)</p> <p>☆伝えたいことを整理しながら、友達と協力してまとめて、伝え方を考えている。(思)</p>	<p>【整理・分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの情報を、発表したいことに沿って整理することができる。 ・情報を比べたり、つなげたりして、発表の資料を作ることができる。
	1 8 └ 1 9	<p>○1年生に発表をする。</p> <p>○発表の感想を聞く。</p> <p>○発表会の振り返りをする。</p>	<p>□発表の流れや順番をあらかじめ伝え、児童が発表しやすいように環境を整える。</p> <p>□聞き手に活動の趣旨を事前に伝え、質問や感想を伝えてもらうように依頼する。</p> <p>☆相手や目的に応じて、伝えることができる。(知)</p> <p>☆相手の反応や状況に合わせて、多様な方法で伝えたいことや気持ちを表そうとしている。(主)</p>	<p>【発信】</p> <p>伝えたいことを言葉や文字、絵を使って分かりやすく表すことができる。</p>
5	2 0 └ 2 1	<p>○学習の振り返りを行う。</p> <p>○見学先にお礼を伝える手紙を書く。</p>	<p>□まちの人のよさやまちのすてきなところを問い掛ける。</p> <p>□お世話になった方々に感謝の気持ちが伝わるように、言葉を選んで書くよう指導する。</p> <p>☆身近な人々関わるよさに気付いている。(知)</p> <p>☆感謝の気持ちを表そうとしている。(主)</p>	<p>【振り返り】</p> <p>活動を振り返って、感想と理由が言える。</p>

8 本時の指導（4/2 1時間）

(1) 本時の目標

探検場所のよさと働きをインタビューの内容を考え・選ぶことができる。

(2) 本時の展開

	学習活動	教員の指導・支援（○） 評価（☆）
導入	1 まち探検の行先と計画を確認する。 2 めあての確認をする。	○あらかじめ、座席をグループの形にしておく。 ○前時に行った活動を確認する。 （全員が、聞きたいことをたくさん出し合う活動）
	<div>たんけん場所のよさを知るために、どんなことをインタビューをするかを決めよう。</div>	
展開	3 オクリンクプラスを活用し、グループで聞きたいことを整理する。 4 決まった聞きたいことをグループごとに発表し、共有する。	○「ホテル海楽グループ」 「いきいきお魚センターグループ」 「ふるさとの湯グループ」 の3グループに分かれ、前時に出し合った聞きたいことを整理させる。 ○まち探検の単元を通しためあて 【それぞれの場所の良さを伝える】ために、どのようなことを聞きたいか考え決めさせる。 （3つ程度） <div>【三宅小モデル 整理】 たくさんの情報をICT端末を利用し、整理できる。</div> ☆各探検場所のよさや働きを捉えるために、インタビューの内容を考え、選んでいる。（思） ○オクリンクプラスの画面を全体で共有する。 <div>【オクリンクプラスの活用】 オクリンクプラスのカード機能を使い、それぞれの考えを見やすい場所に移動させたり、統合させたりして、考えの整理・分類・共有を図る。</div>
まとめ	5 本時の振り返りをする。	○めあてに即した振り返りを、学習カードに行わせる。 ○次時の見通しをもつ。 （インタビューの練習）

9 授業観察の視点

- (1) 児童が、グループで自分の考えをすすんで共有し、まち探検の計画を立てることに主体的に取り組むことができていたか。
- (2) 本時が、情報活用能力を育むための活動として、適切であったか。適切でない場合、単元内でどの部分の情報を整理させることができるか。
- (3) 本時の ICT 活用について、オクリンクプラスを活用することは適切であったか。また、よりよい情報活用の方法や手立てにはどのようなものが考えられるか。

10 指導講評

○児童の能力と可能性

2年生でまち探検の内容をこれほどまでにまとめ上げる力があることに驚かされた。他者の意見を聞きながら手を動かす姿は非常に立派であり、低学年からの協働的な学びの可能性を強く感じさせられた。

○探究的な学びにおける「問い」の質

探究のサイクルにおいて、収集した情報を整理・分析する際の「問い」の立て方が重要である。単に「何を聞か」ではなく、「どのようなインタビューをしたら、探検場所の良さを知ることができるだろうか」といった、正解が一つに定まらない「どうすれば～できるか」という問いを立てさせることが、主体的な学びを引き出す鍵となる。

○整理・分析を「言葉遊び」にしないための根拠

ICT ツールを使ってカードを動かす活動が、単なる「操作遊び」や「言葉遊び」で終わってはいけない。大切なのは「なぜそう分けたのか」「なぜそれを残したのか」という根拠（理由）を明確にすることである。理由が伴って初めて、ツールは思考を深める武器になる。

○合意形成モデルの活用

グループで意見を絞り込む際は、多数決ではなく「合意形成」を目指すべきである。①意見を出し合う、②相互理解する、③整理・分類する、④視点を決める、⑤みんなで吟味する、⑥合意した意見を言葉にする、というプロセスを意識させることで、納得感のある結論を導き出せるようになる。

○教員の役割：児童を信じて委ねる

教員は「教える人」から、学びを支える「伴走者」へと転換する必要がある。児童が自ら問いを立て、学習方法を自己決定できるよう、適切な足場（ヒントや環境）をかけながら、子供たちを信頼して学びを預けていく姿勢が求められる。

○日常的な ICT 活用の蓄積

ICT を文具のように日常的に使い続けることで、学びがデータとして蓄積される。低学年のうちは自力でのフォルダ管理が難しいため、担任がデータバンクとしての環境を整え、いつでも過去の学びにアクセスできるようにすることが重要である。

情報の整理や分析は、目的地までの地図を自分たちで描くようなものである。単に最短ルートを教えるのではなく、迷い、相談し、納得して進むべき道を決める経験こそが、子供たちを「自律した学び手」へと成長させる。

11 授業の成果と課題

成果

- ・オクリンクプラスのカード移動や整理機能が、低学年の思考を視覚的に整理するのに有効であった。
- ・カードの合体機能により、児童の意見が否定されることなく整理を進めることができた。
- ・ICT 機器の使用により、机上が整理され、学習しやすい環境が確保された。
- ・2年生でオクリンクプラスを使いこなせる児童がいるなど、児童の ICT スキルが高いことが確認された。

課題

- ・グループ討議において、根拠（理由）が不明確なまま整理・分類が進められ、多数決に近い話し合いになる傾向が見られた。
- ・2年生にとっては情報量が多く、迅速に似た意見を見付け出す作業は高度すぎた。
- ・4～5人というグループ人数設定では、自分の考えを共有しにくく、特に低学年では3人程度が適切であった可能性が指摘された。
- ・「良さ」の視点の捉え方が難しく、単に場所の情報を知るための質問になってしまった。
- ・共同的な学びを深めるという目的に対し、ICT 活用が作業効率化に留まり、友達の見解の良さに気付くなどの深化につながらなかった。
- ・整理活動において、KJ 法などを用いて最初に似た意見をまとめてから根拠を基に話し合う流れにした方が、活動が明確になると指摘された。

国語科 学習指導案

令和7年11月13日(木)
三宅村立三宅小学校
第4学年あじさい 1名
第5学年あじさい 2名
授業者 久保 寛太

1 単元名 こそあど言葉 ～これとそれとあれはどれ？～

2 単元の目標

指示する語句の役割について理解し、何を指すかによって「こそあど言葉」を正しく使用することができる。

3 単元の評価規準

児童名	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
児童A (4年)	指示する語句の役割について理解することができる。	こそあど言葉を用いた短い文章を読んで、意味を理解することができる。また、それを活用することで文が短くなることが分かる。	積極的に指示する語句の役割について理解し、学習課題に沿って使おうとしている。
児童B (5年)	指示する語句の役割について理解することができる。	こそあど言葉を用いた短い文章を読んで、意味を理解することができる。また、それを活用することで文が短くなることが分かる。	積極的に指示する語句の役割について理解し、学習課題に沿って使おうとしている。
児童C (5年)	指示する語句の役割について理解することができる。	こそあど言葉を用いた短い文章を読んで、意味を理解することができる。また、こそあど言葉に変換した文章にすることができる。	積極的に指示する語句の役割について理解し、学習課題に沿って使おうとしている。

4 指導観

(1) 単元観

指示語には、現場指示と文脈指示がある。現場指示の用法の方が、「こ・そ・あ・ど」の使い分けの理解がしやすいため、教科書では、初めにこちらを取り上げている。使い分けと共に、「同じものを見ているかどうか、気を付ける」という、コミュニケーション上の注意点を押さえるようにしたい。

その後、文脈指示の用法について、何度も同じ言葉や内容を繰り返すことで、聞き手や読み手が煩わしさを感じたり、内容が分かりにくくなってしまったりすることを避けるために用いられることを示している。

指導の際は、現場指示と文脈指示によって、また、文脈指示でも談話か文章かによって、使い分けの特性がやや異なることに注意が必要である。現場指示では、教科書で示しているように、話し手からの距離によって使い分けられる。談話における文脈指示では、対象を相手が知っている（と思われる）か、知らない（と思われる）かが重要であり、前者の場合は「あ」が用いられ、後者の場合には「そ」が用いられる。文章の場合、「こ」は前の文章を受けたりまとめたりする場合、「そ」は指すものを逆説的に受ける場合が多い。これらの細かい用法を解説する必要はないが、用法によって違いがあることを理解して指導を行う。

(2) 児童観

国語については、全員が簡単な文章で教員や他の児童と会話することができる。しかし、内容を整理して説明することが共通の課題となっている。しかし、3名とも読んだ文章の内容を理解することが難しく、3文以上になると文章全体の意味を把握できないことが多い。

音読に関しては、全員が平仮名の清音を正しく読むことができる。B・C児童（5年生）は学年相当の漢字を読むことができ、A児童（4年生）は2年生相当の漢字を読むことができる。

「こそあど言葉」は日常的に会話や作文で使用しているものの、その使用の正確性は十分ではない。

5 目指す児童像

課題を自ら設定し、それを解決するために、目的や意図に応じて適切に情報を収集したり、友達と協働したりしながら問題解決に何度も挑戦していく子

本校では、校内研究の実践を通して、上のような児童を育成することを目指している。あじさい学級では、一人一人がそれぞれの課題を解決できるように、「情報の収集や整理」の場面を大切にしている。また、各教科等の学習に臨めるよう、単元計画を作成している。それが主体的な学習の深まりにつながっていくと考えている。

6 研究主題に迫るための工夫

(7) 課題設定の工夫

本グループの児童は、日常会話や作文の中で「こそあど言葉」を使用しているが、その使い方が曖昧で、相手に内容が正確に伝わらない場面が多い。特に、文章理解や説明の際に、指示語が示す対象を明確に捉えることが難しく、話のつながりが途切れてしまうことがある。そのため、「こそあど言葉」の指導を通して、文と文の関係を意識しながら、相手に分かりやすく伝える力を育てることを目的として課題を設定した。

また、課題設定にあたっては、児童が興味をもって取り組めるよう、学校生活や家庭での出来事など、身近な題材を用いた短い文章を使用するようにした。身近な内容を扱うことで、児童が具体的な場面を思い浮かべながら「こそあど言葉」の使い方を理解しやすくなるとともに、学習で得た表現を日常生活の中でも活用できるようにすることをねらいとしている。

(8) 思考ツール「マインド・マップ」の活用

マインド・マップは、人間の脳の働き、特に放射思考 (radial thinking) をモデルにした、情報やアイデアを放射状に広げて整理する思考ツールである。キーワードやイメージを用い、それらを線でつなぎながら展開していくことで、記憶・理解・発想を助ける効果が期待される。

本単元の学習に参加する児童 (以下：本児童) は、作文力が十分に育っていないため、まとめや振り返りを文章で構成することが難しい。そのため、キーワードやイメージなど短い言葉で構成できるマインド・マップは、児童の特性に適したツールであると考えた。そこで、まとめや振り返りの活動では、このツールを活用することにした。

(9) 学習内容の焦点化 (情報の精選)

本単元の内容は、第3学年国語科の教科書 (光村図書) を基に構成している。教科書の内容を一度に学習すると、情報量が多く、整理や分析に時間を要する。そのため、学習内容を精選し、焦点化することで、扱う情報量を減らし、学習しやすくなるように工夫した。例えば、様子を表す言葉として「こんな」「そんな」「あんな」「どんな」が挙げられるが、「様子」という語自体の意味を理解することが難しいため、今回は学習内容から除外した。

(10) 支援の工夫

支援においては、児童が指示語の指す内容を視覚的に理解できるよう、絵カードや写真、実物を用いて場面を具体的に示す工夫を行う。また、指示語を使った文を教員がモデルとして提示し、児童が繰り返し練習できるようにする。更に、会話活動を取り入れ、友達とのやり取りを通して自然に使い方を身に付けられるよう支援することを重視している。

(11) 日常的な取組

① 思考ツール「マインド・マップ」の活動

本研究を進めるにあたり、日常的にマインド・マップを活用して学習指導を行った。一般的に思考ツールのデメリットとして、「慣れや習熟に時間がかかる」「作成自体が目的になってしまう」などが指摘されている。ツールを効果的に活用するためには、その使い方を学び、習熟するまでに一定の時間が必要とされる。そのため、本学級では1学期から継続的にマインド・マップを用いた指導を行った。

② あじさいタイム

あじさい学級では、日常的な学習の時間として「あじさいタイム」を設定し、児童一人一人の学習習慣の定着を図っている。この時間には、基礎的な国語科及び算数科の学習を行っている。国語科では、主に「読むこと」「聞くこと」「書くこと」の力を育てることを中心に指導している。具体的には、身近な題材を用いた文章の読み取りや音読、漢字の練習などを通して、言葉の理解を深めるとともに、表現する力の向上を目指している。

7 単元計画（7時間）

過程	時	○学習活動	□教員の指導・支援 ☆評価（観点）	情報活用能力 #三宅モデル
つかむ	1	○これ・それ・あれ・どれ言葉の役割を確認する。（距離感の違い） ○それぞれの指示語が、「もの」に活用されることを知る。 ○学習した指示語についてまとめる。	□自分たちの生活に馴染みのある題材を使用した文章を提示することで、学習者が場面を想起できるようにする。 □指示語が指し示す内容の文字数を少なく設定することで、問題の趣旨を分かりやすくする。 ☆指示する語句の役割について理解することができる。（知）	【計画】 こそあど言葉の役割を知り、その活用ができるようになることが本単元の目標であることを知る。 【収集・整理・分析】 本時の学習を振り返り、その内容をマインド・マップに整理することができる。
	2	○「ここ」などの場所に関する指示語の役割を知る。 ○「こっち」などの方向に関する指示語の役割を知る。 ○学習した指示語についてまとめる。	□自分たちの生活に馴染みのある題材を使用した文章を提示することで、学習者が場面を想起できるようにする。 □指示語が指し示す内容の文字数を少なく設定することで、問題の趣旨を分かりやすくする。 ☆指示する語句の役割について理解することができる。（知）	【収集】 板書された内容をノートに書く。 【整理・分析】 本時の学習を振り返り、その内容をマインド・マップに整理することができる。
	3	○対象との距離感等によって活用する指示語が違うことを確かめる。 ○どの指示語を活用すればよいか考える練習問題に取り組む。	□自分たちの生活に馴染みのある題材を使用した文章を提示することで、学習者が場面を想起できるようにする。 □指示語が指し示す内容の文字数を少なく設定することで、問題の趣旨を分かりやすくする。 ☆指示する語句の役割について理解し、正しい指示語を当てはめることができる。（知）	【振り返り】 練習問題に取り組むことで、理解が不十分な部分に気づき、繰り返し練習することで習熟度を高めることができる。
調べる	4（本時）	○例文を通して、こそあど言葉で文章中の言葉を指し示すこともできることを理解させる。 ○指示する語句を使うことで、文章が短くなることを理解させる。 ○学習を振り返る。	□自分たちの生活に馴染みのある題材を使用した文章を提示することで、学習者が場面を想起できるようにする。 □指示語が指し示す内容の文字数を多く設定することで、問題の趣旨を分かりやすくする。 ☆指示する語句を使うことで、文章が短くなり、分かりやすい文章になることが分かる。（思）	【収集】 板書された内容をノートに書く。 【整理・分析】 本時の学習を振り返り、その内容をマインド・マップに整理することができる。
	5	○対象の指示語が、どの言葉を指しているのか考える練習問題に取り組む。	□指示語が指し示す内容の文字数を多く設定することで、問題の趣旨を分かりやすくする。 □練習問題を繰り返し取り組ませて、習熟度を高める。 ☆積極的に指示する語句の役割について理解し、学習課題に沿って使おうとしている。（主）	【振り返り】 練習問題に取り組むことで、理解が不十分な部分に気づき、繰り返し練習することで習熟度を高めることができる。
	6	○文章中に繰り返し出てくる単語を見付ける。 ○その単語をこそあど言葉に置き換える練習問題に取り組む。	□指示語が指し示す内容の文字数を多く設定することで、問題の趣旨を分かりやすくする。 □練習問題を繰り返し取り組ませて、習熟度を高める。 ☆積極的に指示する語句の役割について理解し、学習課題に沿って使おうとしている。（主）	【振り返り】 練習問題に取り組むことで、理解が不十分な部分に気づき、くり返し練習することで習熟度を高めることができる。
ま	7	○これまでの学習内容を踏	□練習問題を繰り返し取り組ませ	【振り返り】

と め る	<p>まえた小テストに取り組 み、知識の定着具合を確 かめる。</p> <p>○小テストの内容を振り返 り、マインド・マップにま とめる。</p>	<p>て、習熟度を高める。</p> <p>□学習全体を通して振り返らせる ことで、これまでに得た知識のつ ながりや関連に気付かせる。</p> <p>☆こそあど言葉を用いた短い文章 を読んで、意味を理解することが できる。(思)</p> <p>☆こそあど言葉に変換した文章に することができる。(思)</p> <p>☆こそあど言葉の役割について理 解することができ、それを図にま とめることができる。(知)</p>	<p>小テストに取り組むことで、理解 が不十分な部分に気付き、繰り返 し取り組むことで習熟度を高め ることができる。</p> <p>【整理・分析】</p> <p>本単元の学習を振り返り、その内 容をマインド・マップに整理する ことができる。</p>
-------------	---	--	---

8 本時の指導（4／7時間）

（1）本時の目標

文章における指示語を見付け、その意味を理解する。また、指示語を活用することで、文が短くなることを理解する。

（2）個別の支援内容

児童A 書字や読みに課題があるため、ルビがふってある個別のワークシートを用いる。また、文量を減らすため、あらかじめ板書の内容を印刷しておく。

児童B 自信がもてないと書き出すことができないため、考えを書かせるときは、教員が個別に聞き取りを行い、間違えがあった場合は正してから書かせるようにする。

児童C 本人が身近に感じる題材を提供し、自分事として問題に取り組めるように学習課題を設定する。

（3）本時の展開

	学習活動	教員の指導・支援（○） 評価（☆）
導入 (3分)	<p>1 例文を見て、こそあど言葉が活用されていることを確認し、本時のめあてを知る。</p> <p>【例文】 神着に正大がある。私はそこでジュースを買った。</p> <p>T どこにこそあど言葉がありますか。 C 「そこ」がこそあど言葉です。 T 「そこ」はどこのことを言っていますか。</p>	<p>○前時の内容に触れて、めあてを確認する。 ○短く、分かりやすい例文を提示することで、本時の活動内容について理解させる。</p>
	こそあど言葉が表している言葉をみつけよう。	
展開 (15分)	<p>2 例文を参考にして、こそあど言葉を見付け、こそあど言葉を使った変容を気付かせる。</p> <p><こそあど言葉を見付ける> T この文章のこそあど言葉は、どこにありますか。 C 「それ」がこそあど言葉です。 T 「それ」は何のことを言っていますか。 C 「お母さんからもらったラケット」です。</p> <p><こそあど言葉を使う良さに気付く> T こそあど言葉を使わないと、文章はこうなります。使っている文章と比べて、どんな違いがありますか。 C 文章が長いです。 T どちらが分かりやすいですか。 C 短い方が分かりやすいです。</p>	<p>○自分たちの生活に馴染みのある題材を使用した文章を提示することで、学習者が場面を想起できるようにする。 ○発問を細かく行い、対話する場面を多くすることで、注意が散漫にならないようにする。</p> <p>○指示語が指し示す内容の文字数を多く設定することで、指示語を用いて明記することの有効性に気付きやすくする。</p>
まとめ (15分)	<p>3 学習をまとめる。</p>	
	同じ言葉は、こそあど言葉で表せる。こそあど言葉で表すと、文が短くなる。	
	<p>4 練習問題に取り組む。</p>	○方向を示す指示語が含まれた問題と、ものを示す指示語が含まれた問題に取り組ませる。

<p>振り返り (12分)</p>	<p>5 本時の振り返りを記入する。</p> <p><情報の整理></p> <p>Tプリントを裏にして、中心にはめあてを書きましょう。</p> <p>T今日は、右に「同じ言葉」左に「見付けたこそあど言葉」と書きます。</p> <p>T同じ言葉は、何に変えられましたか。</p> <p>Cこそあど言葉です。</p> <p>Tこそあど言葉にすると、どうになりましたか。</p> <p>C文が短くなりました。</p> <p>C文が分かりやすくなりました。</p> <p>Tでは、見付けた言葉には、どんなものがありましたか。</p> <p>C「そこ」とか「それ」「あっち」です。</p> <p><情報の分析></p> <p>T今日の学習で分かったことは、何ですか。</p> <p>Cこそあど言葉を使って、文を短くすることができます。</p>	<div data-bbox="869 107 1449 465" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【三宅小モデル 整理】</p> <p>【思考ツール（マインド・マップ）の活用】</p> <p>日常的に活用している思考ツールを活用して、本時の学習内容を振り返らせる。思考ツールを活用することで、内容について整理させ、学習内容の深い理解をねらう。</p> </div> <p>○最初のキーワードを教員が示すことで、ねらいに沿った振り返りができるようにする。</p> <p>☆指示する語句を使うことで、文章が短くなり、分かりやすい文章になることが分かる。（思）</p> <div data-bbox="850 689 1433 952" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【三宅小モデル 分析】</p> <p>【思考ツール（マインド・マップ）の活用】</p> <p>学習内容の情報が整理されたことで、自分が分かったことを理解することができる。</p> </div>
-----------------------	--	---

9 授業観察の視点

- (1) 振り返りの活動として、マインド・マップを活用した内容は適切だったか。マインド・マップを活用することで、情報が整理された様子があったか。
- (2) 本時の学習内容が、学習者にとって適切な情報量であったか。

10 指導講評

○研究の意義

情報活用能力を系統的に指導する三宅小学校の実践は、次期学習指導要領の課題を先取りする非常に意義深い研究である。

ICT を使わない場面であっても、情報活用能力を意識した授業とそうでない授業の違いを明確に示すことが、今後の指導の鍵となる。

○知的障害特別支援学級の強みを活かした教材選択

特別支援学級は児童の実態に合わせ、前学年の教科書や文科省編集の教科書（星・本）など、幅広い教材を柔軟に選択できる強みがある。

今回の自作教材は通常級の3年生の内容よりも難しく感じられた。児童の学習レベルに合った既存の教科書を主軸に据えることは、保護者への説明責任を果たす上でも妥当性が高い。

○対話を生む問いと発問の精度

答えが一つに定まってしまう構成では、児童同士の対話に発展しにくい。3人の児童それぞれに「ずっと落ちる」ような、精度の高い発問を検討してほしい。

個別対応のワークシートは有効だが、それを活用していかに思考を深めるかが重要である。

○ICT 活用の「特支ならではの」工夫

自作教材を用いるのであれば、ICT を使ったアニメーションやイラストを動かす活動など、通常学級にはない視覚的・体感的な工夫を積極的に取り入れるべきである。

例えば、マインドマップをデジタル上でカード操作として行うことで、書字の負担を減らし、本来のねらいである「思考」に注力させることができる。

○振り返り（リフレクション）の質の向上

振り返りは単なる作業ではなく、成功体験や他者の意見を聞いた驚きを積み重ねる場であるべきである。この積み重ねが、児童が自ら次の学習方法を選択する力（学びのナビゲーション）へとつながっていく。

言葉を整理することは、心の中の引き出しを整えるような作業です。単に正しい言葉を当てはめるだけでなく、「こそあど言葉」という道具を使って言葉を短くスッキリさせる心地よさを伝えることこそが、児童のコミュニケーションを支える確かな力となる。

11 成果と課題

成果

- ・思考ツール「マインド・マップ（以下 MP）」の活用に慣れていたため、スムーズに学習を進めることができた。
- ・身近な題材を取り入れた学習問題だったため、児童が興味関心をもって学習に取り組むことができた。
- ・MP が効果的に機能しているのかどうか判断するための指標となった。

課題

- ・MP 自体が難しく、活発な活用にはなっていなかった。語彙が少ない児童に対する支援が必要だった。
- ・MP で学習内容を振り返らせたが、その内容はまとめの活動になっていて、自分の学びや考えの変化まで表現する段階には至っていなかった。
- ・実態として、協働的な学びを引き出すこと自体が難しさもあり、「友達と協働する姿」はあまり見られなかった。

多様な考えを認め合えることができる児童・生徒の育成 ～交流活動を通して～

小学校第1学年 国語科 学習指導案

令和7年12月1日（月）
第5校時 午後1時30分～午後2時15分
三宅村立三宅小学校
第1学年1組 20名
授業者 菊地 歩未

1 単元名 ともだちと はなして、おはなしを かこう「どんな おはなしが できるかな」

2 単元の目標

【知識・技能】

- 句読点の打ち方、かぎ（「」）の使い方を理解し、文章の中で使うことができる。
- 文の中における主語と述語との関係に気付くことができる。

【思考力・判断力・表現力】

- ◎互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐことができる。
- ◎文章に対する感想を伝え合い、自分の文章の内容や表現の良いところを見付けることができる。
- 話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつことができる。

【学びに向かう力・人間性等】

- 物語をよりよく完成させる見通しをもち、すすんで思いや考えを伝え合い、話を考えることができる。

3 単元の評価規準

観点 評価	ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む 態度
単元の 評価規準	① 句読点の打ち方、かぎ（「」）の使い方を理解して文や文章の中で使っている。【(1) ウ】 ② 文の中における主語と述語との関係に気付いている。【(1) カ】	① 「話すこと・聞くこと」において、話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもっている。【A(1) エ】 ② 「話すこと・聞くこと」において、互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつないでいる。【A(1) オ】 ③ 「書くこと」において、文章に対する感想を伝え合い、自分の文章の内容や表現の良いところを見付けている。【B(1) オ】	① 物語を完成させるという見通しをもち、すすんで友達に質問し、話を書こうとしている。

4 指導観

(1) 単元観

本単元の重点指導事項は、小学校学習指導要領における【思考力・判断力・表現力等】の「A話すこと・聞くこと」(1)オ「互いの話に関心を持ち、相手の発言を受けて話をつなぐこと」である。本単元は、「A話すこと・聞くこと」の「話し合う」の系統に位置付けられる小学校で最初の単元であり、相手の言葉を繰り返したり質問したりして、話をつないでいくことができるようになることと、相手の話を受けて話をつないでいく楽しさや、自分の話を受け止めてつないでもらう喜びを感じられるようにすることをねらいとしている。

また、友達が想像したことと、自分が想像したことを比べ、考えを交流させることで、自分では気が付かなかった視点を知ったり、新しい発想が浮かんだりすることがある。そこから更に想像を広げることによって、深い学びが生まれるようにしたい。交流をより充実させるために、ICTを活用し、友達の考えを聞いて確かめたり、文字で確かめたりできるようにして、よりよく考えを交流できるようにする。そして、学びを深めるためにすすんで考えを発表したり、質問したりする姿勢や態度の育成を目指す。

(2) 児童観

① 日常の学習の様子より

児童の語彙が少ないためか、言葉だけの指示では理解・行動に結び付きにくい。また、何をどんな言葉で伝えたらよいか分からず、手が止まってしまう児童がいる。そのため教員等の話し手が絵や図、実物、ジェスチャーを活用し、視覚的に理解を補うことで、児童が絵や図を手掛かりに細かい部分を見付けたり、論理的に考え、自分の考えを言葉で表現したりできると考える。

また、友達(前出)の意見を聞いて共感・納得すると自然に拍手が出る学習集団である。意図的に観察力のある児童を発表者にし、気付きを共有させていく。また、その発言を丁寧に引き上げ、板書や図解で可視化して、全体で共有することで、全体の理解を深めていくことができる。更に、拍手などの反応を肯定的に受けとめつつ、「どんなところがよかったか」と問い掛け、理由を簡単な言葉で表現させることで、より学習を深めることができる。

理解力に差はあるが、学習を積み重ね、良い考えに触れて知識や技能を身に付けると、自ら学習を深めようとする児童が多い。小さな達成を積み重ねて実感できる場を作り、個別の「できた!」を全体に共有していく。その積み重ねの中で、意欲的に学習できる児童を育てていきたい。

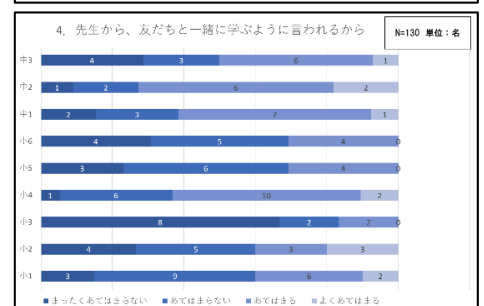
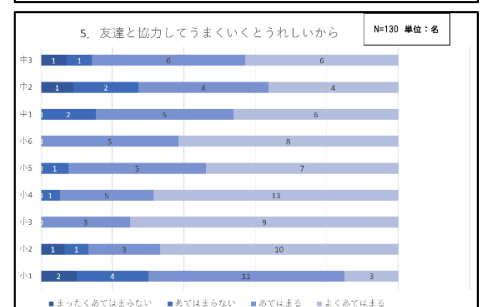
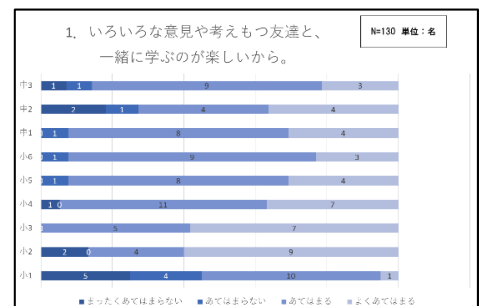
② R7 三宅村教育研究員質問紙調査(10月実施 N=10)の結果より

本学級の児童は、入学から半年ほどがたち、学校生活の基本的な習慣にも慣れ、仲間と共に活動することに楽しさを感じ始めている。アンケート結果からも、1年生は「友達と一緒に学ぶのが楽しい」「協力してうまくいくとうれしい」といった内発的動機付けの項目に対して「よくあてはまる」と回答している割合が特に高く、他学年と比較しても、協同的な学習に対する肯定的な意識が最も高いことが示された。岡田(※2)の研究においても、協同的な学習に対する動機付けは学年が上がるにつれて徐々に低下する傾向があると報告されており、1年生は、他学年に比べて「友達と一緒に学ぶこと自体が楽しい」という感覚が強く、内発的動機付けの高さが特徴である。

一方で、この段階の児童はまだ「友達に誘われたから」「先生に言われたから」といった外的な要因で行動する傾向も併存している。研究結果によると、1年生は他のどの学年よりも外的調整の得点が高く、教員や仲間からの働きかけが行動のきっかけになりやすい。

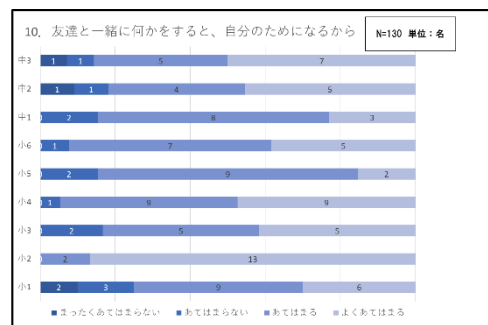
つまり、自らすすんで協同の場を作るというよりは、周囲の支援を受けながら協同的な活動に入っていく段階にあるといえる。こうした傾向は、学びの初期段階として自然なものであり、仲間と関わることへの興味や喜びが内面的な価値として定着していくための基礎段階と考えられる。

実際の活動では、「一緒にやろう」「教えて」と声をかけ合いながら課題に取り組む姿が多く見られ、仲間との関係を通して自己有能感を得ようとする傾向がある。しかし、活動がうまくいかない場面では、「やってもらおう」「手を出せない」など、他者への依存や関わりの受け身さが見られることもある。このことから、1年生の協同的な学習を成立させるためには、児童同士



が安心して意見を出し合える環境づくりや、互いの考えを尊重し合う経験の積み重ねが重要であると考えられる。

また、同一化的調整（「友達と一緒に学ぶことは自分にとって大切だ」と感じる動機付け）についても、1年生は高い傾向を示している。これは、児童が「友達と一緒に頑張ることが自分の成長につながる」と少しずつ理解し始めていることを意味している。つまり、楽しさや憧れといった感情的側面から出発しつつも、「仲間と協力するとできるようになる」「友達と一緒に考えると分かる」という成功体験を通して、協同の価値を内在化していく途上にあるといえる。



このように、1年生は仲間との学びに高い関心を示し、他者と関わることを自然に楽しめる一方で、自律的に協同の場を作り出す力はまだ十分に育っていない。したがって、授業づくりにおいては、児童が自分の考えを伝えたり、友達の意見を受け止めたりする場面を多く設定し、協同的な活動の喜びと達成感を実感できるようにすることが重要である。また、成功や達成を共有する場面を意識的に設けることで、「一緒にやるとできた」「友達と考えるのが楽しい」という経験を重ね、自律的な協同的学びへとつながっていくことが期待される。

以上のことから、1年生の児童は、他者との関わりを通して学ぶことに対して高い内発的動機付けをもち、協同的な学習の素地が十分にある。今後は、教員や仲間からの働きかけを通して、楽しさの実感を「自分から関わりたい」という主体的な姿勢へと育てていくことが課題である。

※1 主観的な分析にならないよう、ChatGPTを用いて分析を全て行った。

※2 本指導案では、学習指導要領の「協働的な学習」ではなく、研究で用いられる「協同的な学習」の表記を採用している。参照した岡田（2014, 2015）の尺度に基づいてアンケートを実施しているためである。なお、論文では「協同」と「協働」はほぼ同義として扱われており、本指導案でも意味内容は指導要領と同一であるが、研究との整合性を優先して「協同」を用いた。

5 目指す児童像

- ・ 自分の考えを図や表などを指し示しながら、すすんで伝えることができる児童
- ・ 友達の意見を聞いて、理解を深めたり、考えを広げたりできる児童

まずは、自分の考えを相手に分かりやすく伝える力を育成することが大切である。その力が育つことで、相手に自分の考えが伝わる喜びや実感をもてるようになり、友達の考えを理解し、自分の考えを更に深めていくことにつながると考え、上記の目指す児童像を設定した。

6 研究主題に迫るための工夫

(1 2) 自分の考えをすすんで伝える姿勢を育てるための工夫

① 指し示して説明するための ICT の活用

言葉での説明が難しい児童でも、図や表を指して自分の考えを伝えることができる。そのため、言葉に自信がなくても安心して挙手できる。更に、指導者が児童の指さしを言語化し復唱させることで、表現力や語彙力の向上も期待できる。

② 見て違いが分かるようにし、比較しやすくするための ICT の活用

音声だけの言葉では、語彙力の低い児童は自分の考えと比較するのが難しい。しかし、絵や図に考えを書き込んだり、文字で表現したりすることで、自分の考えとの共通点や相違点に気付きやすくなる。

(1 3) 語彙を増やすための工夫

① 言葉を書き残す

言葉の意味が分からないだけでなく、文字の表記の仕方も分からず、文章に書くことができない児童が多い。そのため、必要な言葉を文字で確認できるようにしておくことで、児童は自分の思いや考えを正しく言葉にしたり、文章として書き表したりできるようになる。

② 分からない言葉があった時に質問をしてよい環境づくり

教科書やドリルを読むとき、知らない言葉が出てきてもそのまま読み進めて内容が理解できていない児童が多い。日々の学習で、分からない言葉を教員に気軽に質問できる環境を作ることで、文章の読解力を伸ばすことを目指す。

(1 4) 児童の思考を高めるための日常的な取組

① 互いに教え合うことで育てるメタ認知

他の児童の考えを可視化することで、自分と他者の考えの違いに気付きやすくなる。また、友達の

分かりやすい伝え方を参考にして、自分の考えを整理・表現する力を高めることができる。考えが共有されることで安心して発表でき、教員が適切に言語化や補助を行うことで、より確かな学び合いが可能になる。

更に、児童からの質問や意見が生まれることで、学び合う力が一層高まり、理解も深まる。

② 具体的な事例を結び付ける文脈化

児童が具体的な事例を結び付けて文脈化することで、理解をより深めることが期待できる。

具体的には、算数科では、「合わせて」「増えると」「減ると」などの言葉が出てきたときに加法や減法を使う場面を整理し、その計算が日常生活のどのような場面で役立つかを考えさせている。

国語科では、説明文を題材に、文章に書かれている要素を確認したうえで、具体的に説明されている箇所に線を引かせながら丁寧に読み取りを行わせている。

③ 本質的な構造を見抜くための脱文脈化

文章中の重要な語句を抜き出し、それを基に考えたり学習したりする活動を繰り返す。

算数科では、文章問題から「分かっていること」と「聞かれていること」を抜き出す。まず、児童一人一人に、教科書の「分かっていること」と「聞かれていること」と考えるとところに線を引かせる。それから、全体で話し合い、大切な語句を絞り込む。

国語科では、説明文を題材に、「何について説明しているか」が分かる文章に色分けして線を引き、その中からポイントとなる語句や説明を全体で話し合い絞り込む。

④ 気づきを増やす反省的思考

導入場面や考えを深める場面において、教員があえて誤った例を示すことで、児童にその誤りの理由を説明させ、正しい方法を考えさせている。これにより、学ぶ内容をより明確に意識させることができる。

(15) ICTを児童がよりよく活用できるよう、教材を作る際に意識していること

① 思考させたいことの焦点化

文字の大きさ、スライドの厳選

児童の視認性を高めるために、文字や図の大きさを工夫する。また、情報を詰め込みすぎず、伝えたい内容を厳選して提示することで集中しやすくする。

スライドと板書の両方の活用

ICT（スライド等）による視覚的支援と、板書による思考の整理・記録の両立を図る。児童の思考の流れが途切れないように意識する。

思考させたいこと以外に使う能力の軽減

操作や情報探索などに過剰な時間や注意を取られないよう、ICTの使い方をシンプルにし、思考に集中できるようにする。

② 掲示資料と、ノートや教科書のレイアウトの同一化

大きなモニターと手元資料（ノート・教科書）の対応を分かりやすくし、児童が迷わず学習内容を追えるようにする。

③ 教科書の文や図だけでは理解が難しい部分に、補助説明を加える

動画、拡大図、アニメーションなどを活用し、抽象的な内容を具体化して理解を支援する。

④ 児童の視点に立った提示の工夫（最初に答えが分からないようにする）

児童が「なぜ？」「どうなるの？」と疑問をもてるよう、答えをすぐに提示せず、思考を促す演出を意識する。

7 単元計画（6時間）

内容	過程	次	時	ねらい	○学習活動	・指導上の留意点 ◎評価（方法）	三宅 モデル
	題材の設定・情報の収集・共有	第1次	1	・学習課題を知り、活動の見通しをもつことができる。	○「どうぶつになったつもりでともだちとはなして、おはなしをつくろう」という学習課題を知る。	◎ア①（ワークシート）	計画
		第2次	2	・物語に出てくる動物を決めることができる。	○教科書の文章・挿絵を参考にしながら、物語の登場人物を決める。 ○登場人物が、どのようなことをしているか場面の設定を考える。	◎ウ①（カード・発言・ワークシート） ・どの動物の話を作るか、どんな話にしたいかを決めさせる。 ・オクリンクプラスを活用し、どんな話を作るかカードに書かせ、考えを交流させる。	収集・分析
話すこと・聞くこと	内容の検討・考えの形成		3	・動物になったつもりで、会話することができる。	○友達と役割を決めて、動物になったつもりで話す。	◎イ②（ワークシート） ・オクリンクプラスを活用し、会話録画しておく。	収集・分析
書くこと	考えの形成・記述		4	・ペアで話したことを基にして、お話を考えて文章で表すことができる。	○教科書の物語を参考にしながら、友達と話した内容を基に、話を考える。 ○会話文には、かぎ（「」）を使って書くことを確認する。 ○書いた文章を読み返し、誤字や脱字がないかどうか、句読点の打ち方が適切かどうかを確認する。	◎ア①（ワークシート） ◎ア②（ワークシート） ・前時に録画した映像を見て、書きたいことを思い出しながら書けるようにする。	発信
	共有	第3次	5	・書いた物語を互いに読み合い、話の内容を捉えて感想を伝えることができる。	○教科書 p.43 の「たいせつ」で、交流の観点を確認する。相手に質問をして、物語を考えた思いを知る。	◎イ①（発言・ワークシート）	
			6	・活動ごとに、学習を振り返ることができる。	○友達と話しをした時、物語を書いた時、互いに物語を読み合った時の学びを振り返る。	◎イ③（ワークシート） ・これまでの学習を振り返ることができるよう、ワークシートをまとめておく。	振り返り

8 本時の指導（2／6時間）

（1） 本時の目標

物語に出てくる動物を決め、どんな話にするかを考える。

（2） 本時の展開

	学習活動 T：教員の主な発問 C：児童の反応	◆資料 ○留意点 ◎評価【方法】
導入 (5分)	1 本時のめあてを確かめる。	◆前時に確認した動物たちの持ち物や行動を確認する。(オクリンクプラス) ◆単元の流れを確認する。(オクリンクプラス)
	おはなしに でてくる どうぶつを きめ、どんなおはなしにするか かんがえよう。	
展開 (33分)	<p>2 教科書 40-41 ページの挿絵を見て、物語に出てくる登場人物を決め、どんな話にするかを考える。</p> <p>T お話に出てくる動物を決めて、どんなお話が作れるか考えましょう。</p> <p>C 釣竿を持っているキツネの話にしようかな。</p> <p>T カラスと何を話しているのかな。どこに行くのかな。</p> <p>C お弁当を食べているコアラたちにしようかな。</p> <p>T どうして、お弁当を食べているのかな。何を食べているのかな。</p> <p>C 楽器を持っているウサギたちにしようかな。</p> <p>T どんな曲を演奏しているのかな。</p> <p>C プレゼントを持っているサルにしようかな。</p> <p>T 何のプレゼントかな。お誕生日プレゼントかな、クリスマスプレゼントかな。</p> <p>3 みんなの考えた話を聞き合う。</p> <p>T みんなの考えたどの動物が出てきて、どんなお話にするかを発表し合いましょう。</p> <p>① グループで共有</p> <p>② 全体で共有</p> <p>4 他の友達の話を聞いて、自分の話に出てくる動物を決め、どんな話にするかを考え、ワークシートに記入する。</p>	<p>○絵に着目できるようにする。</p> <p>◆どの登場人物の話にするかを決め、どんな話にするか書くカードを準備する。(オクリンクプラスの「みんなのボード」を使用)</p> <p>○焦点を当てる動物に印を付け、どんなお話をを入力できるカードを準備しておく。</p> <p>○机間指導で、想像を膨らませられるような声掛けをする。</p> <p>○どんな話にするか書ける枠を準備し、フォントの書式も設定しておく。</p> <p>○時間を十分にとり、早くカードを作れた児童から、他児のカードを読み、「たのしいな」と思ったカードに「いいね」ボタンを押すと共に、どんなところが楽しいか、コメントを入れるように声掛けをする。</p> <p>○絵の中にある建物や湖など場所についても触れ、話に結び付けられるよう声掛けを行う。</p> <p>○グループ内で、2人ずつでどんな話を考えたかを伝え合った後に、全体で共有する。</p> <p>○話の分からないところを質問したり、友達の話に付け加えたりし、発想を広げられるようにする。</p> <p>◎ウ①【カード(オクリンクプラス)・ワークシート・発言】</p>
まとめ (7分)	<p>5 本時のまとめをする。</p> <p>どの動物が出てきて、どんなお話にするかを決めました。</p> <p>今度は、友達と 動物になったつもりで、友達とお話をしましょう。</p> <p>6 本時の振り返りを記入する。</p>	○次時につながるよう、今後の活動の見通しをもたせてから書かせる。

9 授業観察の視点

- (1) 研究員は交流活動ができる環境を整えていたか。【整えていない 1・2・3・4・5 整えている】
- (2) 児童はすすんで伝えることができたか。【できていない 1・2・3・4・5 できている】
- (3) 児童は理解を深めたり考えを広げたりできたか。【できていない 1・2・3・4・5 できている】
- (4) 交流活動を通して、他者の考えを知り、自分の考えを深めることができていたか。
- (5) オクリンクプラスを使った考えの交流の仕方は適切であったか。また、よりよい情報活用の方法や手立てにはどのようなものが考えられるか。

(1) プリント

★ふりかえり★
・「えを」くわしく 見る ことが できた。(◎・○・△)
・「なるほど」「いいな」とおもっ、ともだちの かんがえが あったか。(あった・なかった)

① どんな おはなしが あったかな。
はなのみち
大きななぐさ
おむすび
ころりん
やくくく
くじらぐも

② おはなしをつくるための「え」をくわしく見てみよう。

め
どんなおはなし、できるかな(1)
ワクワクするよう な たのしい
おはなしを つくろう!

★ふりかえり★
・どんな おはなしに したら たのしい おはなしに なるか
かんがえ ことが できたか。(◎・○・△)
・「なるほど」「いいな」とおもっ、ともだちの かんがえが あったか。(あった・なかった)

① おはなしに でてくる どうぶつに まる(○)をつける。

② どんな おはなしに するか。

め
どんなおはなし、できるかな(2)
ワクワクするよう な たのしい
おはなしを つくろう!

★ふりかえり★
・どうぶつたちが どんな はなしを しているか かんがえ ことが できたか。(◎・○・△)
・「なるほど」「いいな」とおもっ、ともだちの かんがえが あったか。(あった・なかった)

① どんな おはなしを しているか かんがえ。

め
どんなおはなし、できるかな(3)
ワクワクするよう な たのしい
おはなしを つくろう!

(2) オクリンクプラス「みんなのボード」

① どんなお話を学習してきたか(第1時)

誰が出てきて、どんなことをしたかを簡単に文におこし、本時のカードを作る際に参考にできるようにする。

② 絵をよく見る(第1時)

絵を見て、出てきた物の名前などをカードに書き出す。

このようにすることで、文を書く際に、正しい書き方を自分で確認できるようにする。

③ 誰が出てくるか、どんな話にするか(第2時)

みんなのボードで作成することで、カードの複製をできるため、時間内にいくつも考えを書き表せたり、他の児童の考えを参考にしたりすることができる。

グループで共有する際によかったと思うところに、自分の名前のマーカーで線を引かせる。

可能な限り、文字入力にさせる。手で書き込む児童のために、罫線を入れたカードを作成している。手書きの児童は、教員が文字入力し、新しくカードを作成する。

なお、児童が「みんなのボード」に書くことで、多様な意見に触れることができるとともに、教員のフィードバックを記述に生かすことができる。



1 1 指導講評

○情報活用能力の体系的な育成と価値

三宅小学校が取り組んでいる「情報活用能力」の育成は、次期学習指導要領の論点整理でも課題とされている「育成体系の明確化」を先取りする、非常に価値のある研究である。

1年生の段階から三宅モデルや東京モデルを参考に、系統立てて指導を授業に組み込んでいる点は、今後の教育モデルとして重要になる。

○教員の役割：ファシリテーターと演出家

教員は単に知識を教えるだけでなく、いかに児童に「気付き」を与え、どのような「足場（支援）」をかけるかに焦点を当てるファシリテーターであるべきだ。

教科書という「台本」を、児童が感動し、主体的に取り組めるような「作品」へと作り変える「演出家」としての役割が期待される。

○探究的な学びを支える「単元のストーリー」

授業は1時間で完結するのではない。単元全体（本単元なら6時間）を貫く「ワクワクするストーリー」が大切である。

飛び飛びになりがちな授業の時間を、前回の学びや大きなめあてとつなげ、児童が自ら「学びのハンドル」を握ってドライブできるような見通しをもたせることが不可欠である。

○「情報収集」としての教え込みの重要性

「情報収集」は、児童が自ら調べる活動だけを指すのではない。教員が教科書の内容をしっかりと教え込み、土台となる知識を授けることも重要な情報収集の一環である。

基礎となる知識をギュッと詰めて教えることで、その後の探究活動（分析・まとめ・表現）がより豊かになる。

○ICT活用の本質と児童への寄り添い

オクリンク等のデジタルツールは、字が苦手な児童の表現を支え、可視化する大きな武器になる。

一方で、画面に表示されているものだけが児童の思考の全てではない。教員は画面の奥にある児童の内面を想像し、机間指導を通して適切な足場をかける必要がある。

○問いを産む言葉の工夫

児童の多様なアイデアを引き出すためには、問いを「なぜ～だろうか」「もし～だったら」「何が～だろうか」といった、答えが一つにならないクエスチョンマークで終わる形に置き換えて提示することが有効である。

○協同的な学びにおける「非開示」の活用

交流の際、全ての情報を最初から開示するのではなく、あえて「分からない部分」を残しておくことで、児童が疑問をもち、互いに問いかけ合う活動が生まれやすくなる。

授業づくりは、真っ白なキャンバスに子供たちと一緒に物語を描いていくようなものである。教員がゴールを全て決めてしまうのではなく、子供たちが「次はどうなるんだろう？」とワクワクしながら筆を走らせるための「きっかけ」を演出することこそが、豊かな学びの物語を創り上げる。

1 2 成果と課題

成果

- ・書字能力が低くノートへの記述が困難な児童が、デジタル上で友達作品を参考にしながら自分の考えを構築し、書けたという達成感を味わうことができた。
- ・友達の考えを画面上で幅広く閲覧できる環境は、他者の考えを知る上で有効であった。
- ・友達の作品を見ることで、自分一人では思い付かなかった新しい考えを取り入れようとするなど、個々の成長が見られた。

課題

- ・「交流」の具体的な動きや目的の理解に個人差があり、指示が出てから動き出すまでに時間を要してしまった。
- ・交流が画面上での閲覧やスタンプ等のリアクションに留まり、顔を突き合わせた対面での雑談や深い対話が不足していた。
- ・本時の学習目標である「プロットの組み上げ」を達成する上で、ワークシートではなくデジタルで処理することの必然性（ICT活用のあり方）を更に検討する必要がある。

4 成果と課題

(1) 授業研究（指導方法・学習活動の質）

ア 成果

- ・ICTを活用することで効率的な議論ができるようになり、話し合いの助けとなっている。
- ・意見を出すことに全員が取り組めるようになり、理解度の高い児童が他の児童の意見から学びを得る姿が見られた。
- ・動画資料や児童の疑問・声を整理して提示できるようになったことで、主体性が育った。
- ・言語化が難しい児童でも、挙手して発表できるようになった。

イ 課題

- ・ねらいに迫るための整理や発問の仕方、資料の提示について、より検証が必要である。
- ・ICTは手段の一つであり、子供たちが考えたい、話し合いたいと感じる課題づくりができてこそ主体的な学習ができる。
- ・活動自体が目的になりがちであったため、教員側は授業で何を身に付けさせたいかを明確にもち、ぶれない指導が大切である。
- ・自分の考えをもっている、その理由（根拠）を伝える習慣を付けていないと深い学習にはつながらない。
- ・特別支援教育の場合、共有はできても深い話し合いは難しいことがある。

(2) 情報活用（思考力・応用力）

ア 成果

- ・児童の会話の中で「整理すると…」など情報活用能力の観点に沿ったやり取りが見られた。
- ・児童が思考ツールを使うことで自分の考えを視覚化することができた。
- ・話し合いの場面で、自分たちで表にしたり、矢印にしたりするなど、つながりを意識して情報整理する場面が見られた。
- ・自分の考えやグループの考えを整理することに役立ち、自分から表にまとめようとする児童が増えてきた。

イ 課題

- ・インターネットで調べた情報をそのまま利用してしまう傾向があり、内容を取捨選択して取り入れ、自分の考えにできていない。
- ・著作権や肖像権などの情報モラルの指導が課題である（ダウンロードできない画像をスクリーンショットで利用するなど）。
- ・思考ツールを前の学習内容の想起に使っている様子は見られるが、児童が自ら考えを整理するために使おうという態度はまだ見られない。
- ・どの場面でどのツールを使うのかを選択する力は、まだ十分に育っておらず、自力での適切な選択が難しい。選択肢を絞るなど学年に応じた指導がこれからも必要である。

(3) 基礎スキル（操作の定着）

ア 成果

- ・日常的にICTを活用することで基礎スキルの定着が見られた。
- ・全体的にローマ字入力やオクリンクプラスの基本操作に慣れており、滞りなく学習を進められていた。
- ・ショートカットキーを使ったり、タイピングが早くなったりと、基礎スキルの定着が見られている児童が多い。タイピングに困難を抱える児童も、音声入力や手書き入力など、自分に合った入力方法を選択できていた。

イ 課題

- ・低学年のうちにはICT操作の技術差が大きく出やすく、技術レベルが一番下の児童に合わせた学習活動の設定が指導上必要である。
- ・中学年、高学年になるとタイピングなどは癖がついていて改善が難しい面があるが、たくさん触れさせ身に付けていくことが大切である。また、個々の差が大きいため、技術レベルを学級全体として捉えることが難しくなる。

- ・児童がデジタルツールの有用性を理解し、手段として選択できるようにするために、教員自身の知識のアップデートや、児童に基礎スキルを身に付けさせていくことが今後も大切である。

(4) 研究全体（体制・目標・総括）

ア 成果

- ・情報活用能力#三宅小モデルを作成し、発達段階に応じて児童に身に付けさせるべき力が明確になった。
- ・ICT機器の活用が進んだことで、特別支援教室においても学習の幅も広がっている。
- ・作業の時間に差があったとしても、早く課題が終わった児童が他の児童の考えを共有できることにより、個別最適な学びが行いやすくなった。
- ・使用するソフトが変わっても（ロイロ→オクリンク）、困らずに使えていることは、ICTを文具のように使いこなすことに近付いてきている。

イ 課題

- ・OJTを活用して教員の「情報活用」についての理解を深めたり、三宅小Iタイムを充実させて児童のスキルを定着させたりすることで、学校全体として使用頻度を更に高めることが必要である。
- ・児童の現段階のスキルの定着具合を、GIGA検定の結果を受けて客観的に判断し、Iタイムやモジュールの時間を活用して情報活用能力を更に高めていく必要がある。
- ・児童の実態に応じた音声入力や生成AIの活用なども更に進めていく。

東京都教育委員会の指定を受け、本校は2年にわたり、子供たちが変化の激しい社会を主体的に生き抜くための「学習の基盤」としての情報活用能力の育成に取り組んでまいりました。

1年次の実態把握で明らかになった「思考の整理」や「言語化」、「情報モラル」の課題を踏まえ、今年度は研究主題を「主体的・協働的な学びを育む ICT 活用の在り方～情報活用能力の段階的な育成を通して～」と定め、3つの分科会を中心に、各教科や総合的な学習の時間において実践を重ねてきました。

研究を通して、独自指標である「三宅モデル」を作成・共有したことで、発達段階に応じて育てたい力の見通しが明確になりました。地域の「ヒト・コト・モノ」を対象とした探究学習と思考ツールを融合させる中で、自らの思いを粘り強く言語化し、相手に伝えようとする児童の確かな成長が見られました。

一方で、情報の取捨選択や著作権等の情報モラル、学習場面に応じて最適なツールを自ら選び取る態度の育成は、今後も継続的な課題です。教員が伴走者として問いや発問を吟味し、学びを支え続けることが求められます。研究指定の一区切りを新たな出発点と捉え、子供たちが学びの操縦者として、自ら学びの舵を取り、仲間と航路を選び進めるよう、本研究の成果と課題を確かな「灯」とし、今後も学習の基盤の充実に努めてまいります。

最後に、一年間にわたり多大なるご指導を賜りました東京学芸大学 森本康彦先生、静岡大学 塩田真吾先生、東京都教育庁 垣原健先生、八王子市立清水小学校長 荒井雄一先生、三宅出張所 野口由博先生、八王子市立清水小学校 荒井雄一先生、墨田区立二葉小学校 松原大樹先生、三宅村教育委員会をはじめ関係諸機関の皆様に、心より感謝申し上げます。

今年度研究に携わった教職員

校 長	堀 俊 司	音楽・家庭科・学活	船 木 愛 美
副 校 長	宮 崎 忍	少 人 数 算 数	濱 田 良 平
1 年 1 組	菊 地 歩 未	理 科 ・ 体 育	清 水 康 志
2 年 1 組	三 角 寛 騎	養 護	南 谷 悠 乃
3 年 1 組	船 木 司	事 務	山 根 美 沙
4 年 1 組	吉 川 敬 祐	栄 養 士	高 橋 慶 太
5 年 1 組	小 林 哲 也	用 務	伊 藤 和 子
6 年 1 組	細 川 雄 介	外 国 語 活 動 ALT	ロ ス ・ キ ー ト ン
あじさい学級	小 野 雄 一 郎	講 師	小 林 小 百 合
あじさい学級	田 中 由 貴 恵	講 師 ・ 学 習 支 援 員	野 口 江 里 菜
あじさい学級	久 保 寛 太	特 別 支 援 教 育 支 援 員	川 崎 拓
しいのき学級	木 村 隆 志	特 別 支 援 教 育 支 援 員	尾 崎 全 代
あしたば教室	野 上 正 輝	特 別 支 援 教 育 支 援 員	窪 田 清 美